英乃一蝶 [illegible]

12
881
30

御幸(ミユキ)　玉七並

巻乃名　花　以哥并詞也　打きらしれくまつをし
みゆきは文ふはさやうにそのひかりやとかしし大原野行
幸ハ源氏卅六歳乃十二月也あくる年卅七歳の
二月迄のこと也　是にはり文照乃並也　細同　初乃巻
を卅六歳也　并抄を　花鳥ニあやまりし
かくあけしいてしぬ事なくいそきらんるすハ也わすれし
あつらひ行へと　栄　是ハ玉鬘のことを源氏乃いつくしてくれよ
うらんまてともうれともひはりそひ給ふ奴へし　細　玉鬘を
源のおほしきらんや以ちかう可給縁ともの那とや
(れ)とう山のとけらむ哥ふう書給れと書出滝(ヲトナシノタキ)ハ下に
あるこの中哥をとへり毎前よく叶(カナ)へり
このをとるし此段てそうるてつとわしく　栄　苦るすれ

[seal]　[seal]

源氏と云ハ此題号をさしての給へり此源
河 いかにかめてたふらんと乃御氏へよりおこりたる也此源
同 とふかくに人めつゝみ給ひて下におもはるゝ事なしの源
人め侍りしれとある事此詞源下に忍ひさし給ひけり
給けへり 細 源下まんうけ給ひもりそてゆへにようろ
光君との山乃比事可汁也
みなとおもふへの清をしらるゝとにかゝるひかりをしもしかる
忍ひ給ひ名あれ 宋 胡蝶巻に紫上の源と玉とみえて
ましき也雅意し給ふとく源家あやしき事乃つとく
うつくしき清名なれとおもひ何とも給也
彼物しの行る事まつきてもさまさましうもとをかをきを
あるにさりのひとへを相見も思ひひるまとまの給はんさ宿を
宋 玉鬘乃文彼仕物しいはゆるほとんまてあてなとを給へ

ん御ことへありて申し侍きを源氏玉鬘をかへすかへすいと
人乃松みとお内侍めさせし内府のさうそくしき
まかせらるゝおつくひ給そんにもいわてかへらせんとの源氏
のうはんや 細 内大臣也
清らか思ひとらるすくさををかけらるゝはまかてぬ事とのあはれ
まはきてハおもてうすしうにやるとも 細 内大臣乃玉鬘
のうち給ひて又源の家政とはかりて申させやうに
内大臣の北方へ乃中のかねかん我はかるにおもてうすし
うらんしやや 孫 玉へふるとうをむすゐひとよのかゝる給とや
きはんすてくさるらにさへやしとへゐて隠るゝうはとあ
宋 源氏をはうのふもとに内府乃給ひて事露西にひ給はう
ひつらむ給ひんとかまつかうんとの清らんかるへし
おほつかへはし 宋 源氏とおもしくに筆給へともみなとひみて

給ふ也

そのしはすに大原野の行幸とて世にのこる人なく見さはく

を六条院よりも御かた〳〵ひき出つゝ見給ふ

花）野の行幸ハ仁徳天皇乃御宇よりはしまりて仁明天

皇嘉祥三年 光孝天皇仁和二年 芹河 醍醐天皇昌泰

泰元年 河野 延喜四年 大井河 延長四年 栗栖 同六年

大原 此条也 中比白河院康保元年 大井河 行幸あり 十二

月乃例ハ仁和二年十二月十四日芹川行幸 行平中納言

さかの山みゆきたえにし芹河の千世のふるみちあとはありけりと

よめる時也 今の行幸ハ延長六年十二月五日大原野行

幸乃例を摸して書給へり 大略李部王記によりてかゝれたるなり

野行幸の例花鳥の外ハ見えす 十二月の例ハ仁和例を

引用 此書ハ延長六年の例を用とみえたり 柳 巻ノ決

宮毎なとひとく下給ふ又親王供奉乃事ハ皆仁和例也

太政大臣供奉せられし事延長例也 孫）冷泉院乃御時也

宗）御説花鳥 同又御説ハ延喜四年十二月乃延喜帝ハ

野への行幸に鷹つかひ春宮彼母て中宮人雉一枝さゝる

とのふるを摸してかくかゝれたるなるや 此後へくもひくあるへし

うの時なり出給ふをさくるまにて五条のわたりちもとより

御車して桂川のもとまて物見車ありけり 細）西宋蔵也

行幸の道はたいへん陣のかたまつりてあれは也

宗）あさらに行幸給ふ小路大路横小路へ御おのゝさとより

行幸といふとうるなりけるをたはみちゆく

あとこれみせにはむかしをとての人をたえんあるそのあ

かうち 宗）代々の行幸より人此度殊更したる儀也

それをたちけふそくとうさる給ひてめつらしうにわりした

右大臣内大臣納言よりしもはましてつかうまつり
たまへり 細 人からせいたかき人也 栄 人のせいにすくれたる
あまた色もゆるされたる綱也
あをいろハ色のうちあをいろそめ也下かさねと殿上人五位
六位まてきる也 花 李部王記延長六年大原野行幸
天皇著麹塵御袍赤色袍親王公卿殿上侍臣六位以上着麹
塵袍今案るに上ハ赤色の御袍をめし行幸の親王公
卿より下ハみな赤色の闕腋袍下かさねハ蒲陶染也花ハ
竊をはけたる人の出立とあり承和三年大井河行幸
にもかくそ有ける 細 一日の晴なれハおとるとなるや
との殿人極臈のほかハ也さて上ハ必めし河ハあかきとなるこそ
行し給也 栄 麹塵のうへ乃とのはなの行さたえをとる也
さてかくちくてみえてをの色さんえらんなり 栄 雪色風
流のたくひ也 河大鏡云延喜二年十月乃行幸山口へい
らせ給し程よろしきかりし殿上人のさまとそ見ゆる
ら御輿の風の上にこひ乗りてみてはしやうくは見ゆる
きにくるに色の出たしうたしき山の御気色とえうたる
程に殿上とをいと白く雑ハ錦手のやうに見ゆる
いろきてみてはし程なしの声れおハらちるまておもし
ろきことやハはしめてめむちらけ給へし羅乃侍
らんとて九たりきよくと見るなる也
みこたちもみちかゝるとそれくてひ給へるかゝるも見ゆる
そひとるまとまうち給ふ 栄 殿上人の中にも麹塵ひハ
おほ世の色にてまた世の色の木蘭地の外しぬき
きるかさねとす也 花 李部王記有勅親王上以麹塵地
摺布衣及袴 或用紫木蘭 小襖子餌袋と案されは王の
色綺袴

狩装束や布かりきぬの襴(スソ)乃文字とうるの袴をも知ゑ
し或ハ法の木蘭地乃さぬれさしぬきとをさゝるよし見ん
えらるゝ襖子(アヲ)ハ下にかさねあさぬのかやえらくろさと
くろし冠(カウリ)巻纓(エイ)のかりとさゝるへし仁和乃芹川の行幸
に行平中納言の太狩衣の色ハぬいに露と文にぬいつくる
をまこの狩衣乃かやと 新 白き布なりらぬに行と
なとらるとあるや行しぬきのうへにむらさき紙しあて於
とはるやうと 細 狩ばかま人も皆衣裳を整へてある
うちるや春接に見えたり
侍者の狩衣ひとも八 眾 随身とは東乃検官也 随身と
ハ六衛府のとうけ以下と云也左と案随身狩衣の装束
先符卿不宮(イサカ)文云狩衣大狩胡と乃から衣ともある也
からなるや 晶泰(レキウタイ)の紀乃衣白橡(ツルバミ)と云ハ赤き色のゆるに黄衫(キハン)と

萌(アサキ)とあて揩ゆゑりこぬやまた白橡やつくてまき色のゆ
や刈安(カリ)と紫とをさく摺る狩衣(カリキヌ)也袴ハさしぬきのやうしぬき
むの帯巻纓(ケンエイ)乃冠緌尻鞘有ぶかなわ唐弓摂腰鞢(セツヨウカウ)あるハ表
随紀に見えたりと 細 随身也六府と云これもかくるとさね
あうたゑにわうちくあくもうに色ある也
まして世にめでたきものなれど衣の色もいとをかしきことなり
めづらかなるしきぶにもあらずと思ひ出ければ人のいろなれ
くれる 眾 黄色(キイロ)たる地に山あひして文を摺(スリ)付たる也
あらき車なとかもしられけるを見付るなどとある
河 輪のつよき牛車也
うしなるもとちるとなるこれはうきよりもなる牛車
おほくも 細 行幸乃なかの扈従やかしわう官人して検非(ケビ)
違使(イシ)の放免(コレツ)あるやうや 花 行幸あれど常にゆるや櫃川逵

あるへし　宋　行幸にハ橋渡あそはしつくるなといへり
桂川なるへし古橋を不用とそ
西乃対の姫君も出給へり　細　むらさきも
うこかしとみえけり行幸の人のはなやかなる有さまをみ給へし
そこらく　宋　いくらの御ともの人も
内裏のありし色乃はなやかにて　宋　公事のくつハ麹塵色といふ事
此の御袍麹塵の御袍とかし給ふらんしきはなやかなる事也
花　延喜六年より上ハ赤色とめしけれとも天暦に長四
年十月大井河行幸ハ昌泰元年所野行幸にも赤
色と云ふ御衣也蔵人所は麹塵色の袍と云ふ事ある也但
天一乃公也色をきたるとかけり赤色とえたる事あり白
河院の承保比大井川行幸に麹塵袍実白あて赤色の袍唐
錦の袴と見えし給也内宴の時の装束色かくいふとし

保元の内宴法性寺関白赤色と見えし侍り此行幸ニ源氏
の君も供奉し給ひて赤色をき給へきなれとも　細　源氏のおとゝハ
是非なき事也と思はれるをも見給へきにもあるらし
うるはしくうるはしきさまにはかたのみかとにハ人やの由なりとかく
なし　河人主之祥如山岳之峻而不動　凡俗　日本紀
宋　源氏の法衣はしやうなると云り
わかちおもくひとをうつしあやとつきなり給へれとも云へしう
物さとおもしろきもおほはまのし給へれとうきもありしいとん
まさしくれんあるたくへとみえとも　わか文　細　内大臣也此文神とるを
源氏の君もおもふめつる人にもえなしとも　宋　是ハ紫の上の内
前も行幸し給ひてのんもへきたくれ給へるうさくへみへハ見えし
行へと源氏のはなれ給はしきも必行幸なれ源氏の御輿ニすゝめき
ゑたく物とも

ゆうしめちよまほしけなる人くもいはしもて　花　昌泰元年
聖行寺之時車中之女争膝天暦或書出承或長暦四
見紀納言記
ましめかしらおかしやおかしやるそとよろしけにこそちるとも
細 きかれわか度上人ハましてあはれかゝ人さもとあれ也かゝち
ありやまへ八年生ハその人かれ人とゝもちよりれかはかる人にこそ
皆出きしたてまつるとゝ也　案 御息所のめに内府さまをはゝり
及ぶるれと見給ましてもさもくれわかれ人くのゝかなち寺
御とも御息所のかゝつき給ふこちのかめたるをはゝつまく
らせて見えまをえ承とるすれとも也
きしかるとふりもて中かねあふくれの席上人やられひとさを
何事もおもしろもて　案 御息所のこゝちはすまのしやらちのかさ
らよれまくらとうつまかすつるはきや

あさしわするまるはちかしにさくひとすくおかしまれなりあるも
案 中おね又ハあまやかみと云人々まつるにちまくれあかもた
くひちれたちの御とひをとみしさしかる也新をもちれ也
源氏の御ところのおくかさ度ハと物ともも見えし給わぬととひするし
のいさしもとうしいかいしるしあふすくめてさされたなり
案 たつの御ゆとはの御かハやかのかくるとするれとあるとも
大将ハたひちすかのやかさしもとあるやうたハそとも御息所
のさひくて人給んかすへし
さそう源さとひハおうしくるまも也　案 たつの御ゆすとも
息所御めゆる也
おもふ人をもみな物をもかうにあるひとしさへハものゝふもあと
と中将るとの御自ひとめきまれ給ふるとりてさしとゝのかさ
たあるかめやけしんおもふしめされとも見えんくちわしく

えどされたるや　おそなる人　河 まらうど也　宗 此哥ハ尤よき人
とても源氏夕顔巻にもありてハ見ん統給ひしも也まじきと
さやうなる人とあはぬ心ゆへにとりなしてハよきか此人
人をおきさこのまでハさとも人の由ことにあるものもの自(モノ)
鼻(ビ)ともちらしにあまりきよくとの心をとるも色あまで皆と
とされ給へとわれるにてそつハうてさまともなる物とも
無の宮ともおはせん　河 親王作者御在輿　細 同じなる也
宗 源氏澪標巻也と白氏作也
太大相のきもゐくをむかへゐしめくも名のみとひつとあま
めぐさてやるすく井あをたひくはらまつり給へり経るく
記まもちしりそてつとるつきまし　太大相　宗 ひまくろや
あさかへハきやしゆするおこると也
花 昌泰(シヤウタイ)元年 亭子(カタ)院行幸に右大将菅原(スガハラ)朝臣供奉し 西

宮抄云 是ハ御清府云々 是弓箙又此御時ニ兼大将納言之
下弓箙を帯する也 大臣大将兼府とハはくしぬるひ
やうきをくるの大将ハ大納言をかねるによりてかなくひとを
ひ給也と師説之聞司ハかなくひをおすとや 大臣の大将
よるもハかもなとや ひもくるもと大納言の大将なるゆへに
おひ給也　細 右大将ハ質のとや なまりくとハ そくをさたる人
とやかなくひをおひてとそ大納言の大将ハ御舟此日ハやがて
くひを負也 大臣の大将ハ御舟此日も胡籙ハおはんし無
随身ををまうしむる也
いそくしひ女のはくろひさてあるらむかのいろあひみてもあらん
いとうきもるをいとをわくるき清心もちかり八兄おとし給ひくをと
宅　大将ハ年々くほまて帯きくしとまるや 此大将ハ記まとり
ちなきるゆへにけきうるると　細 おほつかなしきや也 かくれ

宗
てかゝん是と紫式部にくりを給ふとの切なりゆへ也
天子をとらしめあらをも不佛奉れへてのよりに是ま
ゆとはくをうつまひをくろの事にうきたつ給ひんそ
逢とつきるしと紫式部のうた給ハよりに持けんとりあるに
にによるを見んおもし給ふと事々の批判也　郢曲さうした
るうのるとたにくへ一毎年給はるとあるしとや後京極大将
大納言二十首
めくらしめくともあ年比撰はよ及かさうんと也
おもくの天のおほしよりての給ふとといふくハ給らん
細
おもしをほや紫式部と内侍督にあしを給へきたるも也
孔
むのん
宮はへをも心あもあしそかんくるしきあなるにやとあひり
見給と　宗　内侍はぬて定つへし給ふて天子の御けんあとう
を給りんよ見んくるしきてとまやとそれハやとのん也

あれくしきすちるとをいまてあれまてむ給ひてんはうり
まうり給へんせうまん八わりしくを容ありしとそあふり
給ある　細　紫式部のん也宮はへ乃まハくるしをあくと給ひ
うをちくつうまつりをやと八思ひまゐるや也
宗
給つの給ん乃う給ふをつかれゆあて大方おもてむき
乃宮はへハ爲をあるとも也を逢とつうまつり給へん勢
らまんハわりしくんとハかくり是を給つのあまり不奇
特なる給ふをちをと給ひしてお常に宮はへひあを
見あまってとの紫式部のくつきさそろや也
かくて野をわりしよりしはをて給へしとくめ　宗　大原野
につき給也
上東門院にまゐるもうに　宗　座を色ふく舞臺のやうなる物也
物あり　宗　給一献さるをうとかへり

法ほとくさともなくてをさぬ乃法ようにひるとにあつた
め給ふとに　呆　法常しめし給たるさ腐やうましの法ようにひと
八稜鏡(カリヤウキヤウ)本也布此のさぬさしぬこたに何しるむるや法ひと
あしさとめ給ふと云説もある又あしためめ給ふぬとの或説有
之　花　西宮(セイキウ)抄云天皇乃服ハ白橡の法衣延喜御時天皇法
左近(サコン)ノ馬場(ハニ)殿ニ召テ菩薩(レキヤウ)ニ昌泰元年行幸行事師
赤白橡唐綾法衣ヲ入(ル)野ニ候ニ召テ狩(カリノ)法衣(ヲ)ニてし葉野又以ウ
せ給く後ニ上の法服法菩薩又あしくさめしとぬ一條も
ある又ゆうこぬとめさまたりしかとも何るやうと　細　あるとし
或説ニ一説本衣とさて一説を後世の儀也後乃菴まるる
夢とゐや
六条院ちるも法くて狩るとなましさ給ふり　呆　六条院より
法一献まうる嫁へし　花　延長六年此御とうさり此附云

条院ハ宮多法への法のまうる嫁へしとの物のまうるよりも六条院
とのつしお汁物也法所幸ふてとて法色ると云法色とと六
法賜也色との字濁く読也一勤色ハ点と可読ク弁花説也
わ法色と云法あ人也云ひ物とふ　細　一献とやゆるや
ものは法まつせ給人をうみて法わしてあつもれと法物
いとのようしとそうせさを行つるあるさ布り　細　菓子地也源障(サウリ)
きほくつうまつ法るあとをやさるる也　呆　肉く今日法給
おれと源へ給出しうとも法物思ありさしあひ給て来
給ぬぬ嫁へし
藤人の左来乃せうと法つひあてさし一枝なましを給ふ
河付(シエトリツエダニ)る枝事　伊勢物語忠仁公ヲなすう雉(キシ)九月廿ト云也　梅の花
我須の言
枝ツ一付るまと九条右大臣集ニ朱雀院より鷹ヲ付て給ふへ
せあるとて紫(ニハノタカガリ)る七尺五寸善遊の折本よりまハ喜ふせさく

多くして表裏に毛のつくるを見と鳥付柴と云也年
内ハ立枝を隔て雄を左にわきて付雌をさきて付之年
ゆくハ雄を右にあきそて後く表ハ雌を賞とする也 付柴口傳
畧之式あるも柴を用と心へ候とも表ハ梅枝ハ弱き事に付る
常にする也もしもと大臣大饗の時ニ用之又初雪朝雉を人に贈
時絶清也又前鷹飼とらへ人乃事を人まゐ三四尺の柴乃枝を
刀目を付もしてなんと柳をうつして付ん一双を付柱
柱係人にかし白象大納言隆親の説柴高六七尺雌雄一双を
付る也度ニ義式ニそそしる又大臣家の亭充脂梅後め
此時用之産所へ其を子の日の小松に付る也是秘事にて松に
鳩を付る事有山鳩也義家朝臣以後不付也鶉などを荻
藻枝に付ル小鳥の類ハ枝に付之雀を竹枝ニ付之十月まで
かゝ柴に付る也なり清親卿式文説 花 正長四年以聖

行幸の時蔵人左少将源後表を付る使めて雉一枝中宮へ
まいらせ給へはぶそまて又蔵人出つ射とまて六条院へ
条しそしまゐる也 細 此時よまるゝ源へ奏しせ給也
雉とをもとりまゐらするの使也 栄 花乃母とするは正親帝
如此之人行幸此時中宮へ後春して雉一枝をまゐり給へ家
と記してある也へし
おほきことかなとよろこびやさしき事のおはれなるに限なう
をあらん 細 女房の男なれはうつくしかるとも也 栄 是ハ例乃式アル事
法也定テ法の作ことをおほくまいらせしハ人これとも女の
志しぬことするゝともおほくりしたまひし思ひけむとも也
りしき也 花 作者の詞也の稽の義式のましきさるうハ女乃
ぬくともあれハ口ゆへに志ともおもるとも相ゆかかる事を也
岩本社業平の山に此の所ふ文縁をとも実方をよまゝ

細 むかしの跡とハ延喜の行幸ありしなり 宗 此河乃行幸也
んハ富にさし此芹川を昔とのへ也又ある説に跡とそ
仁和の帝の芹河へ行幸ハ昭宣公太政大臣にて供奉ありし也
其跡を思て源氏もと交供奉ありしとの事なれハ也荒
乃御時行幸ハ雑と申る後此芹河乃行幸ハと源氏の太
政大臣なる時にて供奉あれとの御事とおもひて申る成へし
太政大臣乃御所の行幸にて供奉つかうまつりつるためしなきとや
ありけんおもふく汝汝もうしまつりをまてゝ給ふへし
花 此おきなハある説をとも今かくて昔ノ事を語る也 仁和二年の
昭宣公乃例を云るなり源氏の君此時太政大臣乃身なれハ
先蹤とおもひし事を行ハしめしとや此行幸と別称せる也
をしほ山こゆえ今はまたる枯〳〵に今日かきりなる語やありけん
細 大原野行幸ハ今日始るにあらずて先例万代乃ちなし

めてたく人しと梅義にはるゝ也 花鳥同 宗 源融公のにハ
さゆきに申事有ことハ此侍ら行幸ありて今日ありかゝとは
ハるゝ日かせと儀式乃めでたき大行幸ハやふめかとのことや
を乃時なりひさくしと乃さてもくと思ひ出るかハ記すことなり
やありん 細 又御幸乃事もなきやうの行かれる事にみえしたる
りくみんとと云る語ようけり 宗 先又彼乃式ある事か
にかくそへの心出かるかハ記すところ也ゆへ
又の日おしく思乃新なり 宗 行幸此翌日源融の武蔵へ給
又あり
昨日ハ大原のまいらせたまふや 細 源の又乃御
かのおほと云あらし御ひきものしらんやと申しかへり 細 内侍にに
奉りものハたまふなり 宗 武蔵を内侍にかかしへ被給し
是は宣旨にての事なり

なつかしさしにやとうちしるをあるほどにこ侍りにまいりしき
ちゝあはれもあらぬうわかしきことも見給へく　花　源の詞也なり
なほさ八詞乃あわれ也　聞　此源氏の詞也常此やうなり
今しきことゝもせむかたく思むすほれゝあるとも可然と玉鬘
乃見給ふへくの事也

あはれのことやかきりなしひ給ふまのかた　細　何もくしきことゝも也
聞　玉鬘を内へ源の内侍よりまいらんとのたまふとの心也
しかるに又いかにしも明日は此ゝと見奉て玉鬘も宮仕へ申と卿
見乃み付給りんと源の思ひて出仕あるへきゝ侍らんを
よろしく出仕すこと也
よろしくありせ給ものゝれとおもほしく　細　玉鬘の心也
侍るしにさの事よ　聞　此詞八方にわかて見るへし
うちきこしめすかせさへかへにまつのひかりともやともうへし

聞
玉鬘宮仕へさまおほしと思きて乃さまくと申りて宮仕と
する事やうあるをこゝろえて心しりをく同心也さやかに思
のえりや八見しと八大宮の侍る也宮乃御事にかけて宮を
見奉しぬとの心也こゆきかたき出仕を言つまてよかる也
此方よく源氏乃まよく仕とて面白とこそ
弄
思ふ心也すくこと見あるゝ心也出仕に宮仕と源氏此方
あてやかに出つるかと心面白し　細　さとなし八ちと勾をり
おくことたる也　弄花同　花　うちとけし八出仕也宮仕ある
やさしくあるやうや也　此方玉鬘乃源の女にて内へ出仕つる也
拾遺
うちきこし宮八おつまたいかに我家乃国てりなかそことなく
れいにれき侍てよもにまんとあるを　細　侍らんにも宮
さる事也　聞　玉鬘乃文云也
うちとも見給ふ　聞　紫上も玉鬘の文を源の見給ふと也

まかりのうちとそのうへおとゝ中宮をかくおはしたれは

細 内侍のかみはおとゝのうちを太上へ源乃はつりてま給ふ也

案 源乃羽林玉鬘を内侍にまゐらせたまふとて又源の心葉

のかと業あり給はむかしにみえたるよし

らうたきの御心を母にみえんなるへし 細 中宮ととも源の御

ことをして氣を給ひけるよし又此内侍のかみは給ひて玉鬘

り寵をとうれ給ひて八中宮の御心侍なりとも

案 中宮の御心かくえさへと給ふとも

彼おほくにきこえさせても女御かくまた内へまゐらひ給へたる事を思ひたまふ

なめりしもちあり 細 宮文の内乃おほくれ御子のことをさあ

らはしてもつかひ給ひても又弘徽殿（コウキデン）のおほ用もくにしかへ也

案 玉鬘の父内府乃おほ給ふとも又弘徽殿おはしまさはたかき

ノに源乃心ひろくあれ給ふとも女御をも内府乃息女の后

あるへし

わらはのさまなれはつかうまつらんことをおもひたまへなから

をとなしうなりてえんなきをえまりはしたなくなとの給ふ

案 御つへ宮はかはる中将の君たちかの卿もえたまひなは

なるかんをさめんとおほしなして八必えらさきえたるれなりけり

の給ふ也 世上はえくるもをと思ふへきとのこと八其心は

さなかんありつきて八御のおほえたきさなれやまうき

へこの人也 細 うちにへ八誰も心をとくめ給へきとや

あるらうてめてたしと見たてまつるこそもいまて宮は心へたて

なかんとかとあしきかんなるおはしめとも見しひ給ふ

案 世上の羽林やうにはつの御うちもめてたくとも御心を

宮つへをのうへていてむとハえつかしうとてる

るゝとてまうひ給ふ也 細 世上乃羽

いそうこあしきもそめて常に給ひんなとの給ひく又源氏
なと　細　源の羽そこやそへ給ふとあり　栄　紫上のさやうのそ
の給ふ済つるを見る事給ふくハ家済くへ乃里ハ打りしま
さむと源の詞也　又済なり　細　前ハ源よりさく又ちり
つきあて言われあつかりしを御誓言あそして返しとふ給へ
りさて又返事のあるや　栄同
あらしさ給ひつるハ営ふくもしぬをとるとてうゆくよめとさしくたん
河蓬家　まのかくあくし済し出るむかふハ言の連れぬまく済へ移るへき
花　めとさしくハ目さうちるとこんも目なさるとれさへきるを
あるはさしや　細　めとさしくもハさるをかくるん也
孔　めとさしくあむとハあさきうちるとこやうにゆるそゆく
て地のさゆるすらぬ也也　栄　源氏済返事也あるしさ
すとハ給日の出んとてちん定の家さとこのりこゆれり

めとさしくもてかくハ宮うちくとして目とさうるやう
あるらんとこまを行幸とこゆなとましをとるを
其はハ済ひるをハ是君をあるれるにとてとや
あとお問してあると絶をすくめ給ひてをかくてとま
り済るさのことをそてとお問しあろれ済まうきの済
てうとのこまうあるさつくとをくりへさも給ひするにく
きのとしきをと　あす状お問しそて　細　宮仕のあすと思
たち行へと也　栄　内侍のさしにこ立行へとのう又云也
とても打りてを　栄　源乃済ん也御誓をと済入吉守の急
アやへ物とをも又絵つ是大狩へ物をとし又内侍のさしに物と
を出るち行へのつきりしもん済まさのあすをとおかり
めしなり済ん数へし
済心あそいとお問さぬをとをたをのつくるけくいうほし

見ゆるなと　弄　よろしきハのところならんや　細　紫式部日記にも
たゝしくさうそきたる納言なと何色卿ころものかさね
青色ちく赤色はゆるしいろなとゝいへる又
よろつゆるしくたゝきく色ハまことをたすくる人見えは
たけに家摂籙とも見ハ綺羅の心ある心見ゆ師説よろし
常に当世のとられるにて　栄　源氏ハさまさまてこそ
よろつ給ハぬみちにまてそのつくりことをくし給と
ハことくしくきこえし給ハんかとや
まして内の御とくあらやかにて此たひそいとやさしくもなから
まいらせ給はよきはからいとめてたき御せさまてなん
栄　玉鬘を文内蔵のものゝをみなもせんとのみなれは
まことにまきのことを超過（テウクワ）したる御用ことゝや
年かはりて二月になりて御用意　栄　源氏卅七歳以下へし

女八宮こそよくはゝかりし給へき御はなかぬとも　細　人の女御（ムスメ）
とらて誰とまもなくてとりくしてとめる也氏神
なとゝそあらまし御てあるや　孫　まゝ人なとの流女八宮
をとも何あらかにかくし給の流宮にある也　栄　あなお
の人の事や
人のこともまめとてあまつさへおほけなるかとはゝかりもしなと
氏神の御ゆるしとめるとあらまし給ひ存すれともそのかし
月日の行き寄せもし給人　栄　源氏の玉鬘を藤原氏の字ありて
まいりまゝにとなにゝを入る氏神なと人に月は来る給
そはえもくらしてまいらすことをもあるらかとや
これもし御用いなることとおもくんみれ春日の神の清をさ
うひぬへきことを憚るまかしまいりて中むましき給うしおもきを
ある　花　氏御用いなることと玉鬘の見るを宮仕へまし

まてらる人へさるにや此歌ハ源中将のやうあめてこまりお
ほすまじき氏神なるとの法とみえぬかしこくに人へも奉
きやうやもしはえめつりひなると奉て八内侍乃清むまとめ
れなみなるし藤原氏としてや人へさに源氏のはむまでなと
やかうすめ春日大明神のはんはさうへきとこそいへんや
細
内侍乃かこなるとに如給りし春日大明神れはんをぬく
やや
思さとる御しきはの名まてうけてあるへし　細　京文は
志うせなまして八源乃私あるやうめや法の作すしとは
らむきしんとや　栄　法の尊き内乃許しれはむきとめ
とく清あるまじくされまさしりて法あちき
なくなさとうまじく法乃をかひさえてんとこって
きこし乃源の心也　藤菜ハ此時内侍乃清むまとめと

はかりし又氏神をもわしくは心むさや　はうさゑき
うてや
右
花とかぞへおもんともれハ女官むかてはなさ名かれ
あそくし藤人のきえてそ　栄　さのとれ称性ともすれ人ぬに
たまささるとれ人とや
とやうやてやうちわしくさむることのきとえあまときも法ま
なとおほしめくしきに　花　当時人乃養子なるとやうのなす
法さりしあり　栄　いまやうやて西世やうに是ハはとのさ
乃養子これハちるなるの様子なるとくいふすともあまはさ
やられなるとさまれてき人の法むきとめるれハ其し
みえわるまじきとの心也
おやとのはちきるもうかへさやうなるしおなしくハわらへの
なしてをとなしせなまんなとおほしはらめて　栄　とそてと

さて〳〵内府の玉鬘を一家にむかへと御らんせん事
は世の中〳〵に源の院よりも御心をゆるして内府
にまかせ給はんとの御心也
此はうしゆひの事彼おほくにかん院せさせ給ふ事のよし仰けれ
ハ大宮もその事をは〳〵さうならぬやうに御はからひあるへき
よし給ひけり　花　玉鬘は院も御さの事しゆひの内のおほくを
請しや給へハ三条の大宮の御方やうの事なる斟酌也
玉鬘の事た〳〵源の院女の事の内のおほくハ心〳〵し給て
また君ハ御もとめに御給はぬ也　弄　同玉鬘
女にてましぬるよしや玉鬘のこしゆひを内府とかは
内の姫君の秋好中宮とかたも如何の裳着(モキ)には
まや冷泉の御時は裳着(モキ)の大三宮のをはハ不定也一説
細　男女ある様也内大臣へしらせるゝ也大宮にもその事つゝしとハ

内大臣斟酌有也　案　玉鬘は院のこしゆひにやとて又内
府をとく源氏の方へ〳〵より給ひてその後のことは申むもとめと
とのすをとくしもやまむと旅人しるしとへにて男のゑか
しかやなともいふ事も男は〳〵ゆひのあるをもさし又女の事か
ことも不定との也院せうらとハ家ハ内院やさ大宮にてそれ
をよりとなる事にもなく内府の返答也
名にはあそひきて也人のさやうしまし給ハ　案　かほの
御孫君ちとに来りてさて〳〵にて内府の斟酌を給ふ道
中将もよろしむる三条のまそにはうひ給ひくらんの事あるへく通
給ておほとおほしめさを　案　夕霧も大宮の御方やうに参りと
さらにひくしわおもしさされてハ〳〵ハせんとらひとつ
ひ給源氏の御心也ことに内府も斟酌し給ひてかくは
らんとの心也

のたまはせしをおぼすにも　細　源の心
よそにいとたかきなき宮をうつして侍りてけるへきことなう
きこは給ひてものし給ふなるむ侍ることなりけりおはしますんおはしけり
よにこのことおはしてんとおぼしとみえて
宗　源之案ハしばしへとも思ふなりけるに世をすれハ大宮なるところを給ひて
ましきさむ騒ぎのなかめなき説毎なしてもはかしまいらせたまふ
月のなかるへし無きをうけなくて八難（ツミ）なりけりなるれハなく
大なるも生世の時はるゝ御所にありしかハさんとや
三条宮にはとらひるひてまかりなる給　細　源三条ろなるにて来
給也
今ハましく思ひやりに出なるまるひ給へとことはかなにおとしまゐを
よそにはしくてはなくさひらとのことへ給侍らうちなるとの
はかなく見ぐるしき心ちして見しうちそ見給ふまゝ給ひなれとく

宗　大宮の心也源の威光ハかなしうぞとあひてかやうし
給へと給ふ御思ひもおとしもせぞかへ給ん也
侍心ちのなさやましきとこゝろさてらるゝにちしておきなる
給ふ侍中うそくにうまてよそまなるれどものなとハとよ
く申す給　細　おほしろきなき御也
くしうハ物うしまゐらせけるを　細　源の羽ましてハ物給そ
しやと思ひ給とや　宗　源の羽大宮の侍心とゝまり給ひそ
見つらひ給ふなよとの心なへし
なふゝしの給侍のんまとりしめおもとろくしく　なけきな中
さもあれたゝかなりともせさせ給ふようとなむおほしけるなり
中のとさもる　なふゝしの給ひ　細　夕霧也　宗　夕霧のなま
やなとくしく物給やうにの給しとや
うちなるとみたきとかゝるまゐりつゝなかなかうきなるとまをしへきをもてなし

御覧しつらるへきとおほしてなん思ひ給へれと　宗　内裏なとにも
さしあたりたる御用有しかは源氏ハ参り給はぬとの詞也
よろしかるへくしくらし給ふまてなむ思ひ侍り　宗　人の心をも
見え給はぬをおもくしるしきをはなやかにとまりしにより
あるくしきとの心也
よろひあるをこれよりまさる人おほくなきまてうらまつるにかゝり
見くるしめしむつかしともおもへる人めれとおもやしく　宗　源より
も年よりまたる人を若きもしのひ給へまれと家にハ待るも
ましきねとも
なまめかしきもえまさりける　宗　源ハおもひの無きにまさるよし也
細　なかりの有りやはりてかしきよし也
物うきに、おなしく給ふ人を思ふとかうし給　弄　物くさきたる也
との事もあるをみつとおほす御也　宗　大宮の詞也　細同

月比よありぬるとおもしめしたなりとありハ　宗　去年の冬より
の物かたりとそ
今のこともくろきやうにおほしとしき人ハ　宗　夜昼競前也
とこにひかく見えまりにしうちるまへのもやりころの
そらに侍へるを　宗　源氏又おひ給ひて今をもおもひやり
思ひしとそ
かふしくてまたくしのひねる心ちし給ふ　宗　源にも見給て大
宮の御方をもあかくちするよし也
とはれしとともいまわもおしきもちるへきとみうちち
これより此忠すりのこゝろとまれるかくひと　宗　古物とり
もとゑる葵上のもとゝれ給ひて今もおもしかぬとの詞
人のうへ物ていとくつきるすと見給しには　宗　大方世のとも見給
またの物の人にるとはとこ進たるもあらはさりし見んる也

さ猶うとや
ことちかきことなんとひまうさせ給ふに　細　往生をそ
色とや　弄　をやく夜乃ねさめかしきを給ふとや
此中ねのひとにかまたにあやしきまてといひかけるひくさこは
うひ給をと見給ふなん侍きくにかをとめまてゐまくてな
うちき侍るをたくちなれよなきて涙の事をすくくと思ふ
ましくれと　弄　夕霧の雛ありまうひ給はよりてとゐる
うひきとは春宮をあはとまなきて有むれ行也
涙ことくもあるれはいとをなり　細　源のふ也さとさる也
るすとや　弄　大宮有れ給もさとさるとと源をへ給也
涙猶うちなとも物ひしいまのとうとあれて事之給かりて
共　弄　大宮と源とや
うちのおとゝは白ふてはまつ給へと思ひそへんとう難う

そてはまいめん乃あしきにつはう給へうん　細　源の詞なに
来り給うとや　弄　内府は思とは此物語りまうへきりの給
うと　源の給や
かくて此宮としやんと思ふ給ふる中にも侍るを伺ふへきはかそ
くあるは宮いめんと有るまされえあまりかかりてなんと嘆
ら給　弄　内府はおほやけのことをと源の給ひんとや
御けやまきとの殿をあや　弄　実句也　細　大宮詞結構也
よさらし此んさし源かしぬあやかとをうらひまのしほる
の給はんかへんるすれはあふさ夜のなとうそ　弄　ねなよめるの
宮乃志るうれとや
中将のうらめしきは思されあるとも侍るをそうしめのる
かをしねとていまに女子くたまて事けりつまて　細　雲居
将のきす　弄　雪なる将を内府乃夕霧よゆるし給ふなる

まちそめしほどのとふまへたゝて物あるをもあつかひおほくあきまさ
やうにかたらひてかよふ人もなかりし　宗　是は大宮詞
古　村雲の立ありしわか君を更にとちて後にもあるしあらめや
侍るなるとまるを物し給はれと　宗　此は大宮の内府のいひ
しけるや
さて見るにはなむかしきもくなりいとをしきをかへす人の本性なりて
細　内大臣の夫婦の性をもの給へり大宮の御心あまへこの思はし
きこしめせんと源氏の給ふは此雲井雁のうへを推し給ふ
かくの給ふ也　宗　内府の心一向にうらみきこゆる人とも也
わしもちゐんをの給ふるやうの中物の心をもしくわりての給へ
宗　大宮の内府の心をそえうらみ給ふとも也
うちまさしひ給て　宗　源の心さま也
いふかひなきはゆるしもなきて給ふまやと思ひ給りてなどにとも

なんつとめややう有りしかとさひしくいさめ給ふこととん
侍し後なりとさにてことおもをまほし侍りけんひとかたくなる
是ぬへいあなん　細　源の詞物いひ夕霧をわざかなるかしけふ乃
るまかれ口入もありまなとおもひしをとりあつかふかくもある
ましなに始よりくさひしとも悔給ふなや御ふかくへさる
にあらしもとや　宗　源の詞説けり一度めしありしうへも雲
井雁をも夕霧にゆるし給へしと源もほのすすめ給へと
もさひしくいさめてゆるし給へてと後へ前に源の給
しまへてやしのちて詞をも人給ふなと也
ところのひとにつきそてきこゆるともいふて給れそ　細　立ありしも
ともへかあつさけて遊ぶのもあらしかは給ふそれ
侍るかいあんと也
やつかれもとまりのましそくをも給へさしらんとへ思ひ給へなる

かくちかしきみつのきよきにすますもにまかせてむへき
わたしてそきこえさせられ　河 漁父辞 楚辞ニ屈原曰世人皆濁我
独清衆人皆酔我独醒是以見放漁父曰聖人不凝滞於万
物而能与世推移世人皆濁何不淈其泥而揚其波衆人
皆酔何不餔其糟而歠其釃又曰滄浪之水清兮可以濯
我纓滄浪之水濁兮可以洗我足　已上漁父
花 むかしいとえ洗濯の心也此の詞はさきのめてたかるの下に又
其の余有るにやあるをの末とハ濁世と云也　弄 みえたれ
末ニ清よりきやハ雲井なる乃るや　細 かくはわしきとを内
大臣もそへしるを今る句也かくのるをハ世々をくさてハ清
のこ何るにも底まるを清きさるにハあらぬるとれとも
孟 濁乃末とハ濁世をと云り末乃世にあるれとむるしあめのきちを
きく人も猶たるに雅くんとの給ふを　かくまをり

孟 夕霧はまゐりたる乃あひ給ひハおもうたるあまり如くらるにもさ
まはされをも内府のむへくきぬりんとハ源氏の給てにハ濁世
みすてむるさきさなるもをんそれを夕霧をも内府姫君をもきさ濁り
と洗さき清むるかと夕霧はまゐりるもて可然人あるそやそ
とのんそ
あめるはにつきあもをもをきはまるれを行ちかちめてえやそと
くんへあれ　細 人の行ちからそあるとえり　孟 末世にあれハよ
ろ何おるとめるをきちめやまちたるそや
そをわしくさくらへ給ひつるるとやと給ふ　孟 さきまつ又内府の心を
源乃御そにハわしくりんとそり給とのん如くし
さみへきうの名り給へをちんわのひまうつ源にと仰りて
細 内大臣乃御をへきたへいと為出さるるとや　孟 玉鬘方ハ内府の
給ひけて何をいましきとちちるへるとそひまうつる行

て源乃侍ありうきさ給との心也
似けなくもおもはさりけるを 河 不意 栄 心なしきとゝ也
さ乃われを 細 あさましき者ハ非人の事とも思ひよらぬしとも也
おもひなからさすかに時そ源のことのゝ云ふらと思ひとりも也
かゝるもをかしと見えしもありしけるも有ありて何なるらんにとの
ものなとのたまひてけれと侍りて 栄 古めかしき程とうれしたる右
ことなとうち云て人ハ内侍乃侍むすめとゝもあつさ侍るしと
なりされそ何なるらんにあひたるとも なかりし也也
是ハ源典侍うちのみ御つゝといゝとも大宮よりおほしめしての
給あるへし
さきさ侍とのゝきのもくあさきはかりとみてとも
細 侍女のもくかたそくかへ也 栄 源乃侍のなかくかさき
かくうきにきさ給しとも

あかつきとさて給へゆるしかし 栄 可然ことなきにひさく 艶所
ハおもつきはしとも年ふか侍りけるとも也
おきくるおもひも見給くもしかし年ふか侍りつるを
細 おもへともありくるおもひさしきしとも也
いそきうめしくん内にありせしるをやきさんなるさし
しのひて宮仕人なるへしかハ 栄 源内侍を当世のおもを
内侍のかみと給也 内侍のかをつかまつる人なるへし
河 延喜式[サ十二]云 内侍司[ツカサ]一百十人 尚侍二人 典侍二人 掌侍四人
女孺[メノワラハ/ニヨシユ]一百人
続所のまつりことをさるへく 細 内侍所也 栄 内侍所とも云
かく禁中第一の司なる所なれハ内侍のかミましはさるハ
若き人とはなるまとも也
女官なるとも宮仕をことはりまつるにさきつきたく

あとらんとやうにすんまる哥とを 弥 内侍所乃宮女也今上
百敷人ニて 宗 内侍のうへに随人也今上百敷人とも也
是も内侍のうへあまれハうちとまるすかた
やうなる也
さるとうへまちかぬらめさも二人文さる人へさんくさ
ぬくやさしきるを 斎 古老の内侍乃きまもかうわり侍る
女人も内侍のうへとのうむ人有とも也 細 二人あるすまとの
内侍五人さる文藤原氏のうへくも有とも也
宗 是も内侍乃うへとある也かるし内侍あれともさけ
まてうへとのうむ女人
たるくしうえしを結うんまつ見すたくかへさし人々すんある
を 宗 内侍のうへに色当人乃文古見乃人か姫あそれハこの院
こうとも先ノ家こるくも見えある人姫とも也

多残家こうく人乃おほえうろかして 細 可然人ととえてしうくへき
とも也 弥 松本家高シ人のきほ乃精性たくゆへさんよ
うる人こそ也
家のいと名もさまそてあるんくすんいあしへすり高見とゝに為る
斎 家きたくれるうく家家のいとつきをとらなたてうや
はく人乃まもと甘まさなん人を内侍待あまて任しうるれうや
家うく女宮仕人のうすゝと申さのん人をえて古まる見え
らるゝ也 細 松乃家のうへうせきる人とも也頼ておれも
此儀志うる人こそ也
志るきくにうしうれうるのゑこしひあてハ 細 もとまも二人もまる年月乃
労ハあまをたしく可然人うしとえくうる人さとの意也
弥 多すれ人ハ精性まよくぬ也也 宗 古人見えの旅惜さなるる人
ハ仿しう某人あうくハ為見まれとも年月の古学丸覚り

て内侍督たちまさりたまひあれとさゆう此人ともあるへしとや
その人ありてもさてありつゝかなるたくひあれとさる
なきを人さもあるましとあらしも　栄　素人ありて八省けまし
いふんや
大やけの御後見となりたまふへきを給ひんとおんうちかくに給へ
まうしを　内にて親性とえらひ給ひんと源つより給
出とやそれハ御覧とゝのふるや　源氏内にて給ハぬ事
とハおもひ給ハぬとや
みるをそれなりとも給へもおもひ給らん　細　此給る事をおもたる
とや　花　御覧も親性ハ内より人なれとや
宮はうへ内よりさくすちありて上も下もおもひとよりひめて大事
あそんさまたれ　弄　さうしもくまうてると文は人を
うちとハおもひあるにも内侍督るゝ後ある事も

細　ちうくしうらは段とさらめむらなまとの給
患して宮仕する出立るは可従露と此人さのんとかまへ
おへしまれと是ハ内侍所の段とさてさめんかんおほまハ人
のむもてやあらせんハおもえなれや女房文段にてまきを
とてもかくるなれなれと文けるとさらしひとつ人をに
てハるれや
打御やをさ海あてさる事のるをはかりさまなまなつこそのお
もむきをきてあたりんとハなくしかうにあそうけき
やうに御後しまれと　花　宮仕へあそやうしらまてひよう
て出立てそこはけさるなみともお上まつりさにこくとうく
右につきて大宮の海の定めかくめし出さるハかの院
くしきやうなれと任されも文人つうにうる人さと
云んや　栄　さるさもさるともう宮仕へハさることし

里よりて出立ん両月あるハ内侍ハ不限尚侍清く
とのくはしくにかし　わさるゝハうらくしくるねとしも
んと思侍やまき清ゆみて行る衣のことゝつきさとも腰の紐
をとふくるめきくんとハうらくしくるぬとハかり
あとの文清しをかくんたくわか身のありさゆうしくそさろ
つのらすもへかれとこひかうき侍しはつてりなん　幸　されとも
位高き人の子ともたるゝすや　栄　かゝすうちゝ又内侍ゆあり
給ひ見くるしき程とろすめもかくもて位高き人の子
ともあるまくひとも也又ハ内侍の尚侍なともなとも望すある
あらひあれハ源氏をうきと給と大宮へ給や行幸へし
よそひのほとるとこひまく給事　細　内大臣此清ま(め)て可
細也源の清くまゝみて八郷ちかひゆる也　栄　玉鬘の年齢
よく知給へともと大宮へあは思ゆめきての給也

彼御為あるハとにかん宮まかなると　栄　玉鬘をハ内府の
嬰給さんとも也あへハやさしきへき也
いつ為ハとも我ともやあさしめまいらしく侍るはつて
あらてさいめん侍るへきよしあもも侍し　なやうそうなるすなんと
あらしゆへきやうを　栄　源の玉鬘の身上をとりなさるへき事
ともも内府へあさしめんとこひうと清ゆてあくてと
の給宮の祖源の表大宮へまうすとの給也宮あまりなよ
くん給給へともかにの給也
おもひめくらしゆせらるゝにやしと　栄　玉鬘ハしゆひの
つゝくに内府の清まのよしの給へんと云事をめくらし
て御彼宮しうと大宮の清るやうに内府許賦し給
とのことも也
清あやうにとつきて据るまいらせたまひ給へうし　細　大宮の

はるやうも御たちゆひつくとさ故障ありしるなり
まだ打ちむれなくもひとまうりき給へ 花 源もきこしめし
ゆひもと申すと同し也
よろしう物をきこしめし給へれは御ひとりともさるゝはりて子と
みんと給ふる 細 大宮の御悩ようらしき也 花 大宮の御心に
もたてくと源氏給へり可能なしものをさうしゆひつる
又なりひとなとせるゆゑ也とさるゝへし
さやうにつくへきものせさせ給へと申さ給 花 大宮よりも内
大臣のまへ此よしの給ひはりそされけとの源の詞也
宮にしく侍りることとみ 細 宮の御詞也不審し給也
花 大宮の詞也ひとへの給ふなるにとさすることもうき也
しこにさへはゆくに 細 内大臣也 花 内大臣みくるを心ひとく
み案せる人もとかく思ひかへもし給へるか心うるれきも

にさき子くへくみえし内大臣のうられ給らんとの給也
かはれのりもんへとゆへかすなくひかちなかるく
細 さはうれしと申し給る也
かく引てへうくちなしらるへん 孟 内大臣の子なへ源へた
よろしき給るなり
此年比うとき給ひてあかりぬるなやと申し給へて 細 大宮の
詞也義おほさる給へれと京し源のまへきむゐのへなりて文也
をも申さく宮文の給ひしとさすてはるかに奴給へるう
也当座の気合り大宮への給也 新 うとき給て可能也
此可見読なり源も又とうと給ちらへあるや云後也此印
細同新一なうき給ひてもありめ可為也 花 源の
御心慈悲ままし候と御繁盛て申し及給て源の御事
ありぬるなやと大宮の給也

さるやう侍るならめ　細　源の詞　案　源の詞也子細有ことゝ也
くはしきことゝものおもしろもとのつゝしみ給ふて行てん
案　内府もとのつゝしみ給ひてんと也
うるはしきみちとの人のおほくひまなるなどは侍れいかゞさん
うつしてもしらうるをぞひつゝ侍らんと中将の方を
むかしは人をうらみ給ひし人うもしもおほさるゝを給ま
しや清くちかき御事も給内の有様との女御かく三条の宮
まかせきおとゝやかにてかくしまうしあるくとしく給らへつ
にさひしきをみて　案　心してもなき人の御所にとにかく
もとまれハそれをうつさんハ中くあさましきこと人の心
侍んとや　さま侍夕霧の給はみもいまさに志して給ね
とや大宮ともましく行ところへちかうある給ひ給へ
以かうしき給はせとまちうち給ふて給らん　案　内府の心也

源の御様体うめしきと也
清せんとも又てたへやしわまし也さは侍らぬ人も又くく
しくあるへし　案　大宮の御内府の為にも志ふかく也源の御詞
御ひさは侍らぬ人もあらじとの内府の心也
中将ハ御ともに心にて物せしまつらぬると帰りところなく行て清
子ともの気うち　案　夕霧ハ清仍十才をまもしきにせぬ
ての事也
むつましく御又へきまうちきみたち事れ給ひける納言と
きみのとさらぬへく気をもよそふ事も気多へきとうり
て物さえうしきやすらかなるとの給ひぬれ大宮の清して
あり　まうちきみ　弄　諸臣也　案　内府ハ面為ものに思ひ
陛下を述して給へし大宮へ気いてせらるゝ也まうちきみとは
也大臣とハおほいまうちきみと読也

六条の院とくれとうかゝひよわたらせ給へることもそのさひしきに給はれ
たへあのことわりしくもなくしなきくもあるを
細 大宮乃文の詞
まことしくいくさきのしるしやうなく何してわたらせ給はすん
やさしいめんにさきくまうりしきこなるゆへもあるなきと申させ給へ
ことも 栄 大宮よりきこえさせ給ひの給とへなすくま申内府よりわたらせ給
つとの文なりや
なにこともみなあらん 細 内大臣の心也
此姫君の御方中将のうちへまいりなやと思ひわたりしまつる給ひしとやも
くは此世氏のこゝろさしもなくなけりてこのことをせちみの給ひわれ
とくもなくらくぬさ侍よ一ことうちなそてうしとなとさうらへはと
くまうしらへ給ふてとえはしし 栄 雲井の雁乃ゆへ也大
宮又源氏のすをも給ともとうく内府のこゝろしへ給ま

しきさとや
つまにさのくる由なひいつくまぬなとかるにかやせきくう給はるへきつ
いそあらくも 細 夕霧のもくはいちしとんいう
さきをいわてくれらるもと内府の心也
人の御ことになきにかくるそてゆるしてんと思御も御心とさ
しなきとその給ひんてよとくはひらるゝ給りいとくいはすひとく
ちなくしんう 弁 人の御詞也 栄 夕霧と雲井雁のことん
のつまんことおもしへはそまことにおまえなるやうにきこえすしまゆ
夕霧りゆるさむとも一わたりもさし侍そて大宮を
源氏との給ひしやとさせてされましきさとやいるまとうる
ひかりもんとはいう
ましきとも給ひしもあらんとやいとましくぬ給
あやなくんなるうしされとまやうもかくの給ひわたくしもなさいめん

ましくまうちわびるめやうさくにくしきとちかしまゐりてこ
そなたもさしにまうらめるをおぼしあかりて御さうぞく
などにひきつくろひてさんおもとどくしてきさ御子をあ
らそひわらはゑよそひもちつとわまゐりきつれて参りゆき
まほのくしき 弄 あまひまやもまのし又やまをうるし内大臣の
ふあやなくなりける也 細 つまうさうあしひ行也是内大臣
の御むくもと 案 夕霧にゆるきんうえめるあしんとらひ
やまとひ給内府のあまりさしきはや御くん敬へし
と筆者の批判乃詞なりや
宣の月しきなり 案 大宮の御ん心を塞して以ての詞也
たまふもちろのくにまのし給へり 案 内府のすまのたるく
とうきうれり又ふとき路も打恐したる法給とも
妙と次も何ひく 細 高き人あひさる也

いとまうとくにおもむくち 河 宮遠也 案 主人の宮おもしろした
家とも也
あゆきまいは 細 歩き姿也 案 内府の心もち歩をそくせらるゝこと也
大臣とかんほそらひ給へりとひろめれはさしぬき桜乃下
かさねいとなかくしりひきてゆるくとおとさしひかる御まて
あるしあるしきゝしてしと見んて給へるに 花 赤色布衣袴也 桜の
下かさねは表白裏赤ひそめ也 細 赤色布袴とかる也
あり 案 桜の下かさねは表白裏葡萄染也ひそめは葡萄染也
六条殿は桜れかさねのうされに参りたるよしにとやうきの御そ引かさ
ねてまうでをもちらる大君もてうさへまゐくるまゝん物なし
花 是は布袴とは見しくはらとやうきの御そは常乃さぬ也下
かさねとは見て御へもて大君姿はさえたり物るし袴ぬ
案 桜のうへへ御物也とてやうさ御のちとうすれぬへし御

そこは常の事也大君姿ハ親王なとをいふさる也
えんことそまゝさま給へるうちにさきさ清くろひ給へる所とこ
さ候ハりよろしく人ゝあも見えし給ハ侍りあるとし　哥　内大臣のこえ
つまことゝくしきも源氏の引清くろ也給り八ありすくひ
ても見えらぬとや又云えろのまゝさるも給へるのてそあり
め容儀（ヨウギ）なるとも云双（ブサウ）なりや源を内府まて見合せとも也又
まさるも給人あまて旬をまさりて内府のるのまゝも可然也
なと　細　此段あ義あり其ゆゑ人ゝあも見えし給ハ侍りけり
とこさことを源の容義あり見ゆる義あり又義を引くて心よ
さり給へとりうをと源のことゝも也其末ハ内大臣也ときこくし
きこえ内大臣ハまさる給へきとも也二様共用也
栄　内府の歴てや清く急也わつ参り給ハえまゝしかるやう
あれと源氏のもとつより此を増（ニサ）り給ハぬとも也えまと侍りとな子

まち歴てみるく威光のあることなと云り
さんたちつきしくにいとも物まさりまたるけるあしくひあるく清
とひ給へり　栄　是ハ大宮のまことまた也
殊大納言春ミス丈なとも八いはゆる清くるゝなとまく
一細　内大臣の事也　栄　大宮のまへこ内府の腹ならぬ此君身
なるら候へし
皆あり出り抑し給ふ　栄　官位をきこえ給ふるなとと云り
とのうくわさとも思ひ死ありおほしたるく風へことなる紀なる上
人　栄　此人へくハ内府のあし急給りんとも思ほされねと思せ
清給り参り給也
らし人の四五位の殿上人ハ上達部の中ぬ将弁官なるとひとらし
やうたまえうしき十よ人侍とひ給へれとつきくの又位六位
なきへとおほく見ゆるしきあまたさいひあられみるあひ

にあらて　私　宰相内侍はまのことなるへしや
そのかみをさへひきかけられつゝ涙もろなるを　細　人の
うへにも大宮の事なとあるにや　栄　内大臣のことを云り
梢のあはれなり　栄　園生の藤のいろにいつるをみてあはれなるや
おとしめらるゝも涙をいかゝおもひめくらし給ひつゝ　おもひしられて
よろつにあはれに思ひ給ふことをなにとなくいひ出給へるさまはしき涙にも
ことさらにあはれ深くも心ひかるゝ給へるかたにいとゝなきかなしこ
と打ちなかめ給ひ心そ給はぬ心の底にてたゝ宰相といふると
ことはしたまふの給ふ御けしきかけていらはせ給ふにや　おとゝ　栄　源のことや
給ひしましたるとおほくめしよせ給ふ　栄　源氏へ内府の心ありとなり
心さしなや
心ありてこそあはれなるとみ給へるとあるにとめしなりたまへるなり
思ひてけり給ひきなくしてまいらせんや　細　内大臣の源へ申給ふ

なり　栄　内府の詞也めさましきなととてかうしてなとしなか
いふや
涙もしやらし申しせん中給ふ　細　孝事也　勘当（カンタウ）也
栄　源氏涙折檻（セツカン）のこともうしたり也
なんとかはこゝろをさらにあるらんやもかるなれほく給るを
とふらひきこえ給ふに　栄　源氏の詞也こゝろはそれぬ内府の
うしろかけなきへきこえたまへるかくしたゝみてとおほしめしと
きしろひたまへての給也下に夕霧と雲居雁のなるを
まつきこえての給ひなへし
たゝとのやとおほせたまふりにこゝろのうちにあるなと思ふまゝ
みてまつのしくれ給ふ　細　雲井雁のまちなみやとある給也
栄　内府の心也夕霧と雲井雁のことをとて下に入てあまたて
の給ふとやうてきこゆる給也

昔ものとおほしやきわくるしのことにつきて心の色さへてあるへき
心のうちを世のつらき給へり　細　源の詞　大やとうもしへし
ねをとおしはかるやうありておほし世を乃はうしろをもはかりま
つりたまふ心給へしとする心の世とおもひてこゝそ心給へし
河
沈翼臣未君之羽翼　見史記
内はまれやうなることとうちまもり給へれと　宗　是は内大臣の心
をさ察して源氏の給也一は秋好の中宮を始給ふ又一を
雲井鴈を夕霧の事させし給をさしひ給事は内進
を内大臣の女をさとおほしさぬことまもりてさてしくしさ
やうなれと内大臣の心さしは源は内大臣の宗とあるへし
となん也
それはうちうくの事ころしてさ侍にてそ八打はつるものさしを
内にてうふとおもくなん　私　内にてそ給あるやうなる物数

あらんさしきこえぬ中也
あくとしとちかくなりはなるゝ給ふ年よりひまなくこゝろの事しへの
事かひしろ事なるをとえんかん給へることをいとまなれはの
給世え　宗　とやうやしてつもる年に齢をそふとも
事こきおりてうけなき内大臣事もひとつは給へあるへきま
たしき源とみえ　細　万機の政をしろ給へるをまかせ給也
私　内大臣はつきみひたはなる事なれと志うしてた中しめを
一　ならしくも立ちなると給へとの給也　宗　内大臣の官位
二　限有てとは関白の御事をいくしき官の御給給り
おほひあくしうとあるなり
そのうちなれをとひさと志め給へくてそかくとてひまありし給
さあるとおんとしめしきたわるとくさるを中さ給へとも
宗
関白のことくしきつきなひとをせよへてそ内をあらしめ

あてしき中へハらハはかへてそこなひ給はんこと
あはれにかなしかるへしと給ふと源氏内府への給也
此あしへそこまにおもとあはれなる　弄　内府の詞也こゝろには
御あそひとの心也
まいつくしきまてあはれけなるひんよ聞えるはとおもく流
給んせうしきりと　まいつくしき　細　故ニ後悔するにとゝ也
弄　若君をハおもふまものしたてとするをとおもふ云々也
朽ほあをへて侍らうまつらしきかて　弄　桐壺の御かたの時の
事なり
たゝ身とあらへ御方をも給はしてうまつしきはかなう見ん
なといてそわかくしうしぬ御みつから侍るとのひ給てたゆや
出あらハはやうかくう侍るをにいてうまへとの　細　ひきかへとも流
たくさあらハしや云すゝとも宮卑下してのの給也

内府の源へ卑下の詞也前の詞は源氏の御と思ひ給ふ故
名やうのかくとの給ふに対してとくに此なうはらかきうらん
をりそと色をあらかて見るへし心は源の流杖助と
まもとらるとの心を申をたり
亡給へまてぬあまた侍ぬとちひの御方にハきたとのへ
つり　細　源の流見可ひるてとまちえちるとも宮にるとゆるり
終へるも　弄　源流息故官位ともあるも
うちゆるつとのことんおほく侍るあるるとうしこまり
中絵　弄　年頃まる君り池ゆやとの心也
その後はそてにほのめかしそ参て出あまりも　細　御整の子也と源
云出給也　弄　内氏物語しはつそて
此内府まかららかほくへし
おとゝのとあつかきしよめつかしろあまた侍るあるくれとはしけり

ちかきわたりに　一 按之　細 内大臣也　案 右大臣にてあるへし
夕霧の中将をさすなるへし内府のちかき所也
そのうちにかよひありきたまふとあるにてしらるゝ也故へしさ候ハ
内大臣乃詞　案 内府の詞也 両説の不審乃時夕霧のこと
くらゐ給ふをといふ
あふの浦にて思ひ給へられ侍るに　私 両説不審の時
やよひ廿一二年頃へし　案 かやうの事はいそぎて不審ある
を源氏へうけ入つるを思ふゆゑも不審の時なりや
まうしをきあさましかりしことのを思ひ給ふる　細 まとはるへき
しかなや
いふかひなくしたまへるも思ひ給へるにつけても　案 内府
出仕のよしとの給へり
うちくしたるぬしのうへとも聞えさせてさゝのうへひ給ふを

うれしくも見えたるしも見給ふにつけてもまことに命なかう
みるく　細 こと心なき人はなきやうなる也　案 内府の詞也 中宮のお
ほきさきとも也
ふるくはらからは猶これに哀をつくすとは見えてたにこそ
世にかなしき御事にて世の人の中にてたにかなしかるへき両説の
物語ありしをくなりし後もつきせぬあはれをあはれとおもくなる
きこえさせたまひし後ぬるゝ袖の文字をあつかひのくあ
りきさかりにまかりてあひてを　細 御誓ひなどしたる也
案 源氏の歴ある人にこそ御誓ひのことをきこしめせる
との給ひて
はかなくひさしくなりぬる世のありさまとも給へ出てまかりてしき
きとのまつりにはたらかせん心ちもし侍るとて
一 案 不審乃内また故院の御事とおほしつゝ御行て侍るさを

ことはりと也
何となくおりしさへ六条院をとこひわたりやう
ちしかりき給ふ　宗　源のことし侍る時をとかくりきれと
昔々とにはしかられ給ふ也
宮たちましまさぬ母御息所のことを思しいつるにをき
侍る事おりさ御心さへ思ひとりたまへらるゝにくく
てとくめぐく　花　葵上の侍るをと大宮も思しめし出さる也
細　葵上の物かたりをましうると也
しかくとあるさ給ふあさ衣はまにんとなりける　河　葵上
ゆるすしかくとあるさ給ふとみひく河まきとく見まる修
情深かるし　宗　大宮はましまして葵上の侍るさと源乃御
となひ行けてこ出給ふと也
ゆ家はひまぬれと　宗　夕霧と雲居乃るすきとは源の給出

ぬれそや源の心奴へし
中将の侍るをもうちにて行ひはなりぬ　細　雲居の事也
一かしらはなしと思しをさてくれたくちいまんとも
人はろく思しそめ　孝　用ことなるしともうしめ皇一婦
し思しとさし也　宗　内府の行も夕霧とさしの事
行も曲もなしと物かりしめして給出されましきせん
源の心也
彼おとしかさ人の侍久しきちかたり侍しもくしらくてさ
まんにもそ侍られなる心ちし行有り　細　内大臣もよろこ
いそちりたる物ととも也　宗　内府も源の給出されましさし
て急えさし行りてんめえ夕霧のことをと大略同んとの
内府乃心也
ちよひも侍ともにはつしめ御心きさと　細　内大臣の事　宗　内府

源へ渡れの詞也
うちつきにさそうしきをもやとて　栄　織なれたとのんや
よそのうしろまつりは申すと花くふちすん未るへく侍るとと給へ
も　栄　ともの渡れ丑も縁ありてこさんとや
たくてこれはちやうともよりしう見えし行ことろくをとせすし
し日よろへさもを行ては　細　源の詞はまきのるよや　栄　大臣
の渡りをよろき給りなてしとし日ととて女御のれまきに
内府ちしゆひ給へとの事はしを宣ふて定行と見えたり
申るも行へことう宮しちまち給ふ渡りしきさとうとくあ
をのくいて行ふ事きいとふかしおちたとものへくと
あつうかあうつるあしむめつしさ清きいめんまいと渡せ
しきうさた清るは　栄　内府り源へ渡せあまとの詞也
又いつたる渡ゆつりのあるへきはんとゆえとうつる源も

ちとハ世ひよしたりあるを　弄　実色を源の内大臣よゆつり
給しは又何るすをうとくへくこ也　細　花なる筑いて天下
の執政ととも源のゆつり給しは又何すとさりとや
是を定ちかくて推量しゝたるいや女御のことハ家給ハ
ぬとや　細　るんとをして　弄　各それつくあつ推量と
乃詞也
おとくうちつきにいとふかしるとんもとちすく御服を行へとぬ
とし侍きとるを御やうんとるんあつくん身え給へくん
ちしめきをおまへ　細　女御とのゆしくゆりくこ給也
栄　内府の女御乃るすを宣ふ御家しきともされとも又
親うりて孫とくんもいて御も親うちたおもやめくや
たくめてんさくうけ見えあち給りし　弄　女御を源ふき
あうもとさ給さし内大臣乃こひ給也

やむことなきかた〳〵もとゝろきてうきりてそのつゐに
まてならさにけもとくにまつりしく物の中のこと云ひとくらくあ
し給ふなめりやと御おもむき　細　紫上ちかとの御はらにし給へも
人めをいとはやおもむきなと也　侍るもめてて師令ハし給
りしとてあるらし給や　宋　紫上花散里同しちる也と
源のとくろまて御せあらいにたゝえし給ハはかくと宜
くに親王との給ひて八省侍りの人信くちられて八里つ
ちりしさたにと更ゆつりて出す事をありし給と内侍
の寮あし給とや
細　くちおしくれとみ連をきりはもとへきこえあへ
源の言ふはれるよへおもはしと云とられもちゝく
吉けるも空や　宋　内侍も源の女御をあきらし
給は口おしくれとも心ゆるとも又まさともへさうとや

さてもいはゝともち氏清あつかるに当まつりくせんよるとらあ
はしのおもとらん　細　無をこそ源のあつかへたまへせを
くるしきれとや　宋　源の清はうち入内侍のむまそめると
の継（バイクハイ）細を給ひん八侍りおほしのおもらん洗（イハンヤ）色ハ源乃
君也しゆる人まれもとの内侍の心也
宮つゝへさまにおむもさ給へてん女御なるとのおほさん
るもあらさるしとおほもとともかくもとひよるとの
給ひんとさそかさとへきこととのはよしいまおほし
ありかくの給ひに二月つひるちはさまりけるさ　細　内侍督
すゝきり給ひて女御の清たるもので也や　弘徽殿女御
梅壺のこと斎宮の内侍督に奉り給ひて見出まいらせかお
くわはもや　宋　斎宮の宮清へるとに出さるゝ清
の清んらう給ひて女御ちとのともあかれてんの女御

ゐことや正しき見中にくましく海をこえおもちさ
あらくんとやされともとりくを源のころゆるを路とき
てありまうさんとの内行ん也へし
十六日ひくんのさらしめていとよそ日あまりあまちらく女よ
とさ日あるしと　河中表中秋昼夜各五十刻时正也仍
日本なちも彼岸(カン)斎(サイ)法(ホウ)経(ジャウクウキャウ)云一切衆生依(ヨツテ)持(チスルニ)二八(ノ)
斎(ヲ)二十方世界(ノ)一切衆生離(ハナレ)苦(ク)得(ウ)楽(ラク)霊(リャウ)瑞(スイ)而已(ノミ)乃(ナイ)至(シ)彼
岸(ハ)者二月八月八王(日)幸舎時修(シュス)二彼岸(ノ)斎(サイ)食(ジキ)法(ヲ)一
抄　彼岸八时也とて吉日也とて行ふ事也
かくへやまうちと常うちふ　宋陰陽家ちも吉日ぞ入り
侍るや
よろしくおもへしまきとし　細　大宮の法服とかうり
いふ紀ちる路らく　宋　まさしるまと源のひ紀路とも

まれのとまるを行ておもくにやあうそうしくらさらにとる海りに
細　源乃玉鬘れ侍るる人也
あへさてとさとをしへ中まし路人て　細　内大臣りおひまうを
行人さるのちをとよみりましみ路也　宋　まさき乃あそを
玉鬘に源の路也
かくれなる法んをおやとやのへあるしてを背のさうくんをと
細　玉鬘のん也ちゑ文よるをも表ちるみるや
おほせも物らうけとうまうつりあら　細　うらの字好也かく表字
あるとと八字まうひあけまとととちえ文りとうまうちる人一路
とうかしさと也　并　玉鬘のん源もとみうらくと路あり
ら文りとうまんをとうまうしくやの路也
かくへる後八中将乃見ぬもとまてくり尓ことのん乃路ちうてるをける
宋　夕霧りて源乃玉鬘れとをうかるを路かへし

あやしのことゝもやむへなることゝいひけんもさるへきことゝもあ
るに　花　君か此巻にて源の君わかれ給ふを夕霧の大臣と
見ることのほかに思ひしるゝかれ故を愛しうちて侍るを
ありけれも立侍る也といひ侍るなり　細　君は此日のあやし
たるきこといひあへるをとり也　宗　夕霧の心也
うちの清まうち人への法の程ようちもなとあめついひ出まし
て　細　雲為雁也雲為雁よりいまはさるところとも侍るとも
あり　抄　雲井雁よりも夕霧のことを待といひ出ける也
あらぬ思ひなれはあしきとなり
思ひよらぬ事なるをと　抄　むと雲井と見すれる
宗　夕霧のむすめをとけぬるところやしきとも見えかとと見
かゝへてちかれとするをさらしてとや
志まつくしきさんちもて　宗　夕霧の志まかあるなともとや

されとあるましきをあなかちにさるへき事とありけるをといへ
るにつけてこそ人目もつゝましけれおもひくしさなれ　細　夕霧の大臣
のおもはるゝ也　宗　けしからぬ具なることく夕霧はいひなし給
とや宮人のみなうしたり
その日にありて　宗　雲井の雁の日比とや
三条宮より思ひやりに御使ありて源氏のたゝこなたとはちゝの
まいとすくもいとさるましう給ひて　細　夕霧へ文ある也
ゆかしかりもいみしきなんとさを　細　文詞也いとしくしきを
是大宮姫君のもとへ給ふ詞也大宮の文云也
まうちの思ひこめ侍れと　宗　勤敗申されとや
はるかなるもあるましきためしなるをも御心ゆるしえへくや
とてなん　細　命あるかきためしや　宗　大宮の源氏にあやまり
給へとやそれなてさるゝまをゆるし給へとや

衰りうけ給りあきしめたりつもちゝを　細　我浮まことなる
のらうや　栄　大宮の冠者をわかむすこを宮あらしめ給ひ
けむのえんをいつくしききこえてひあるらん　栄　かくいやせ
とも浮気らにきこえしとや　孫　冠の孫とも思ほし
めさんとや　栄　大宮乃冠者を孫といへんと静敵也
ゆりあつる冠者の事を祖母とも云給りてそれをしき
り隨て大宮を云ひ給りんとのこゝの給へり
あつゝりたにひもてゆきハたまくてきわりあさなまぬをけりとやけり
細　冠者ハ内大臣の御子なれとも大宮の御孫又源の御子なと
いへとも葵上はらの子なれハ是も又孫と云こと　花　祖母ハ
親母ハ内と云女あれハなり　栄　大宮の子也冠者ハ内
なのむもてあつまれハ句編大宮の孫やまろ源も大宮のむ
とはゝくのくまなをそとにりくかの大宮ハ冠者ハそあれ給

さるへきにや冠者をさうきこえたまへるに御心あるやうなへし
河注　冠者との御こと云ひきこえ給ひくきあけ給ひとに更に女の事なとも
御前へ参りしけるをたまひしのうき給へるを席ともちる事ありお
ろしまして事とも源氏しけむるほとちれハ御給そ
あらいたる御文のきこえなれと　栄　源氏も冠者の御ためにおりし
ましてたまふのうちとも御給付給ふとや
いつりやこの御文むつかしハ云女の御捕し給ふるを御まへ
てあやしくおもひけるこの子をなりむれいとかく浮て御ひ
きあけりるをとらうちくへし見給ひて　いつりや　細　いつり
やや　栄　御めてたる心也
かくるも冠者のまにゆきをとりまえ給へるかれ　花　ふかきこゝろけことを
波くしきの歌句也
三十一字の中にことにもしハきくしるくえへあるにいれることも也と

玉のひかりひかり　細　亭後ことを家をいふかて式アの宮ある
ゆゑんの相のよそ紀ゐるをおしきつやをへりるとこれ
これなりやえ出国ともたりをもよう夜きりまれす
妻しお連えとも此亭の歎やされとそ連ハ杉白ちれえ
えさうぬ事あるへし古人此法しあることも　宋　張に秀
白ちち方る亭ハ作め女るそとも妻り白れ外ハことく文字ちち
まくらちれとも更ひく源氏の上らひ行嫁へし
中宮よりも志ろきさ法をつくきぬ法るしあまの法法ちく
にあらくて是このはかともまに　宋　此るりしあつるへしくや
花　鬢上のるを見よとつるあや
かれるを経紀の心ともにりありあるくそ大葉り終へり何　諾
香方自唐土傳来の此式ら色又唐よるを和合したるを若
是皆是凡梅枝とも　和之紀まのくま元唐より傳りの逆

なおもの　細　河海義いつ連ありてをも有へし
源氏くみあんくは法さうそく人てのまうにくしあすかき
まてとるましくにとりて行へる有さ法おとりまさしくはらはらく
まつきてかくらりの法んそをともにいと見へり終へまたお
かくらゆるを　宋　是上ハをとするをも此すぬ丸まさを行るす
すれん不及や御ん上花散里ををよりは嫁へし
東の院の人ともの此法いそ紀ハきり終られともとりなひ字
そ終へき杖あしねえ女をくさをとくしあるに　宋　雲蝶ちを
あきへし
宇治ちの宮の法くあやしく物ちあうりくをいはるへきことの仁
用ゐとくきぬるいの法んりあそてみろてうこの法いうれとよそその
てらくハこうつりてくさむとおきありしあ　宇治ちの文　宋　素橋
ゆるよも

かくのことくなん思ひて給ふる義なるへしとそ
河 喪服也
おほみやの服をきる一とせ 弄 服衣なくしても用る事なき係
一周忌純ハ服衣なくしてもよきをきる事也 只河を
あひて服也 宗 服衣の用るに似たれとも此外ハ似あはぬ
やされとも服衣なくても用る事なく
かたくるしきやうなれとも若き人のめてたくし給ふらんあ
りしなる 河 藤袴也 こきなる也 花 いさゝか紫のうへへる様よ
そめたるを云へし 弄 藤袴色の藤袴よや一周忌
宗 あはれにもやハ紫めく訶也 哥にもいと見えぬ様なるめてたる
よや 花 紫のたくひ也
ゆかりの藤袴一色 河 合藤袴ハ中なるのある紀藤袴也うつの摘語
とかくしてあ 弄 ゆかりの藤袴ハうしあるを云給へり可勤

若めてたくし給ふを 末摘の ある紀ゆく 藤袴にや給ふ
ゆかりとよりて もとめてうらむにそかへ
ると 細 中よる紀也
紫のゆへにきるとみゆるゆへにかなちの心さしもよし紀のゆへに
ゆかりの藤袴いとうあはれなくして藤袴の心とあて
弄 紫の色にきそへてとめる色也 細 紫にもよるとみゆるとゆへかちの心の色も
みたる文也 宗 紫のゆかりぬ色やあはれなちかうくもあるへと
むつまへきとたるへき也 河 うらしきを見よとある紀とも
あり
むつ紫の一もと(ゆへに)むさし野の草はみなからあはれとそ見る
これを紫のゆかりとあはれと紀ゆきをあらと給ひ給へる様
かやうにしてもいとあはれなるへきもの草ならはとあはれの紀

かくぬ所申しきこゆるを紀人かへるあはれなく物清くこうしたまへん
見過さいらせたまつらりあるへきをれ 細 おつくらむきを見お
とるしきや 弄 同双紙の詞也 孫 地也
さすかにちもちのまのやせて 宗 源の詞也たゝしもしぬ
人とも也
うなりきはしは清くたを 細 源の仁心也人々ことを語るなり也
きしみたす心ひきなん 宗 清見てやるかくは曲とひ語りけんと也
又かくそのいとくあらうし語給ふとひとつ道たん人々りおもと心んを
いとくるしきん有りや出の行 又かくこ 宗 常陸宮なる也
末摘花と大切りき語りきと思遣たん人りおもるとて心えん
いかくるしさとの源乃詞也
清こうちさきのきもとに達んのおるしもちれくあけりと
弄 末摘の云し哀を常に語る也返本又このむをもちとなり

思あまてそうらしきれなを道のし哀見らなまとにあれともおもへも
ま 末摘花や上句は卑下してよく語る教あしぬあれて
む事りしえあれぬとのんあるへし
清もむくしきに有しとうとうなき 宗 今をみ行あし
きとや
思ひくき見とかくはよう世のうち語り思としまつくきも
のたわしさとかへ語んし行て 細 ちかくこゑるや思ととか
心也は微妙そうさくと思ふるなれや思うつ道あるかん
くるしとや 宗 思てきやれあるひちひとの御也くれ
あれひとを人あるまや思はくやたらうつまそとのる見
文字つれあるや語ちるきくこゑる也
此あさうちんほとてまして とかちくるくて あきうを
あむといとたくるを行て 細 物語なるとある時をいつく語

ひとゝせさゆうれんへさへまうてありし若宮して候ぬ
し給へきとや　宗　紫のうへも有し程にもうけ奉りしを（イかた）しとせ
しうそ通さへまゐりしかやうに源氏いとわびしく思ひ給ふとや此
事扱つてん程にてや八紫の上見えしてとりつるぞとてこそ
せめてまして有つゝみましてとくとのかんやう力なくてやうを
紫上ちかひ遊そや不もろうとつゝんとハ其力くもる紫上の
これも其源氏いふとともにけろかひつまりをもちあるやうにてこそお
さうしきのくめやうのか如へし
此源氏ハさへうしくさむ哀せんとの給ふ　宗　源氏の
ことに乳母へとも古事せんとや
あやしくへのこひうりましさ御心なへしてあやしてもはう
ぬへきさいとなれとおくさまにうき給へく　宗　源氏のとふるあり
今かよふはかしき御ちそくひた形のくハいひよしや事と

るゆへハめさましことものとくみへさにうき給ふとや
唐衣又かへすかへすと給とそ色はへくそかしくらうを添る
細　玉鬘乃巻にすゝかりあへし此事ハ源の上給ふてう唐衣
といふ事を能く扱給へる哉也　宗　源のにくむ事ハ末
摘乃うへ衣とふ詞ありもとき給ふて扱給へきにくぬの行をし
もとちの詞を見あはせて扱給や聊しての如くへし是を
言ふ乃時にもとめて読へし
河　ウツホ物語
いくたひかきへいひかへし衣のへそくとうしうかへしけれ
花古
かへし衣日もゆく今ぞ有ける時はなを思ひくそへきうひしき
末摘
かへし衣きえんのけしこれハ今まてにあくそろうかちつのこ
玉鬘乃巻
こさてされハうしてられあかりて衣なへしゆかとてん袖をかへして
此巻
哀あはてそ恨しもくれかへし衣更のたまもにうされきとわすへて
思まてかへし衣三度扱給ふなにかへし衣又かへし衣くとを

くさねくらうら給つるも嘲哢(テウラウ)の事也
いときなやうにのへ乃ならてこのむまちかられハこのしても
なるありとて乃へをなら給へき 細 源今給まなそて末摘へ
乃へをなり給也
見いとあるひやうにうしひ給てわかいとわし 細 こここまむ
摘也
ろうしある様みも給乃れとくるしうう給 宋 末摘を嘲哢し
給ろやうにおもひ給りんとんらるしきむ摘の心給とも
細
嘲哢也
ようるしといとおほうやうちのおさへハ 花 唐衣といふ文
字おほさるゝも 細 幕子地也ゆやうのことをとうけるなし
なれとや 宋 幕子の批判乃詞也うしなれてとや
河 無用事也

さしむいたる事も給ましきほんなれとめづらしくにほう給ひし
後ハいみしうと涙んまうてよれたるくまうつ給へりきし
こちるとなへいうきるとに 細 とく對面する女のこゝろ也 宋 末摘驚
見ありてあくハ色様みまいうきら給ましききんなれとも涙
むまとめとゞ常給てなしくれも内府うしゆひり 源へ子
子来り給とも也
又まなくめつらしき侍ましるさを給つりまにわさと涙
んとくめ給けることゝ見給つるとくしけるなれ物うつ 宋 事
かゝるふあるへき式とも也内府のこゝろ如へし
扇うりりてわけけり 細 源のこゝろいはこあるるるや宮す母て
もるし又宮家すてもるなれをいひれこにかくまうて
あえ入給るうとや 於内府のこゝろおやしきこゝろ如へし
宋
源氏のたしなみもちなれしとの殊(ルツコウ)海りこれまち給ふにて

ゐるとの内府なんや
いのこれみて　細　清多といゆんある時や
以進なり給　宗　内府の清出とや
給の清よりきをとて清る絶みて　宗　大宮家之の按弁ハ清さ
まつ進る絶ゆれと此家の八一瞬方為乞し給とるんや
うちの物まし以とみるるく去つしてを給みて清さられ乗る
や給　宗　玉鬘の物りしまけ須やみゆるくハ中見一とや
清とゆみつくまえ乃くる示よるとハましくきくらとりんまとて知し
き給とくりしまてるの寓る給　細　午猪の姫ハえ伊のかなる人
ききも八家子とし添りあろうしてんのんみて無おこそ
にし給や
やきしうゆしう云ひ出のて行へと　宗　玉鬘もと見給家との
内府なるや

ききひいなとゆくまくあるへくなれハ　按　みえくれるやうのんや
宗　内府乃家みて玉鬘の若君をとりて後将しられと給
すうちつきにんなりしとや
もちさむもとひ給ふおとくえ急ひ行てぬまへしさるつ
宗　内府の重家之なるうしとゆひ給へく若のへくと思ひて
一条太政殿し給さ海や
あるまのわとくこるひハ心みしへさ海乃るすハくをきを待くねハ待
のあやめとまろをも給ましくあんのこてぬへめとうくさりて
於よのつ此れさそくみと出て給　花　此姫君の家まやうる
給るすのいきれとつましさあくし行てりてしいめしへ清ま
つるすをを待くぬとなや　弁　源の祠や　細　易常のさ
もくしや八内大臣れ家子とるとて行まつてさ世ろるの桜
露なるれなんに首へさ作清みと源のく給や

花　是ハ源の内侍の給ふ事ハ源とも思ひよらぬにたく
見給ふやうあるてとまるかしり行へとも可放　孟　源の
翔也　若の心をさえさも給ふ雲衣の心なり思ひま
てみてたゝし行へきやうのことも行かんとてぬ人
何やしくさうんとも何の何やめとよりも行ましく
とされ玉鬘の室まて参る給ふ所とも源の給へて
ハ紅給ましきとの心也玉鬘を内侍の源すとも又源
の心にむかへる心それを源ちかなくてさんなさ給へとの源
の心あるての給也
又たゝしくにやまさきやうへきかさ何もてさんかたくるを
乞ふかとに　弄　源の悪たる事よくしけるしと内侍
の給也　細　内侍の翔源の給んころはなるにとの心の
うきふとちすさくいふかとも世に年あるしちすなしくさまし

さもあらはあれとてかく思ひさためてさも行なるらんとも
つゝまへ給はんと也の給ふ　細　かくもてあつかひ給
ふらしきあさハ源ちすれるすとや　私　内侍の翔源へ申され
たり紀氏年月まてをきらしき恋めを何のむくし給
也　孟　思ふてゝあしきもちすれ源の心とかしけるすきみてハあ
まとともとしてまて玉鬘れなるを思ひとめさを給恨こそ
あやまちむとの内侍の翔也
うしめしや奥津玉藻をとり何くまて磯くれなる何さの包よ
細　今さらまつてもと帯るうとも也　私　内侍玉への返事也心を
詞也　孟　内侍の返事也心を玉鬘れなる雲をと見給ふまて
あれりまつしきを給ぬをうらめしき也玉鬘をあまの
磯かくれなるにたとへたり　花　後撰(ゴセン)十五唐崎(カラサキ)にて
へり車よりまつ見たるをとりもちる雲衣れうしに書付

てみるといふ女ありさくつらし　何もんよろこくのむるゐ
と思ふらんわさ以ておもとらへしありめして見るを
とて猶清くこともあへ侍きるされ給姫君いとそうつらしさ清
さ侍くもの　弄　兵部は何ともれんと云ふにつきてうやといへとまつり
ありし清らもちこるを事に内大臣の御禁をといふ侍ままて為給
かぬとまうさちるしとうくうちりを給也　細　弄　始二同
さしはとひ清くましさにうおのく給りてしも彦　箋　源氏の内
蒋のまつしますすや事のつましさに兵部をおそかさ
給て源氏兵部と給也
よろへありくら添清よりちりやきてあまりも為ぬまかうとそ返
花　もつうへ憂よろふへ之るや　細　わか身のよろ人いかくるも
ありしとをるやさおりて為とも吉給いわりしよも源の
をかさ侍るちて侍るすをかくし給へり　花　源氏よ御禁て

清給也兵部は御乃弄始へし　箋　源乃夜兵部也らいふるへを
まいりら添清り御禁のうちつきくれ給へいまくいの
あとくいへも為給のぬ御禁とや其は源乃いりいまりま
しますと思ふしての給ふ又よろへありといつを御
禁は侍も右くよろへありまとといひあさをも為あと
いく添ふしきの清まし侍も故有内蒋の為給のぬ
とやもつうへ先も憂よろふへていろも
いとまつるちり清うちつきてとにあんと中をも給へをいとを
とりまにあんと中をしゆるくれくて出給ぬ　細　とをと為給
そぬをまうさちるしとうくらちあるや　花　源の翊大兵部うち
つきに内蒋をとうくち給やうあれともかくの給也兼乃兵部
をも御の兵部と思ふへし　箋　御禁を今まて為給のぬを
惜給へてふるまゐを給うちつきるゐをいひつり御禁の翊

也又内府のむすめにてわたらせて退出し給ふなるへし

みこたちつきゝれんく給ひちかくはとひ給へり

はかなく 細 浅き也

清き心ともおはしまさしと思ひ給へれは 細 兵部卿宮髭黒

思ふなるへし 箋 玉鬘にしらす給ひてもとのことに帰り給ふとも

此相なとかくうつりかはりぬるをかくれあるとはかりと思

ひとつにも給へるの席乃見ゆるも 箋 内府乃玉鬘かくさ

まえへし君まし給ひとは思はぬ人にくみ不審し

給ふ也

中将弁此ことよりそはのかたへ給へりける 細 中将を

柏木なり

人心ましてもことうちとけてもうちとけ給へるもわかいひなとり給

細 兄弟にても忘れてこそありしものをかくしてもことのそ

ちらしくもあれはまうしく思ふ也 箋 頭中将のこと也

弁なくそらうちつてさうしとあるめとはしめまて 箋 此人〳〵玉

鬘にあさからぬ心ありしかとも今はことゝ変り出き

きこえて兄弟中よと知らくうくそめやさしう

さ候ことあるおもて此清とのことなり 細 六条院のけしく

のみすと給へるをとつり源の院ことゝ弁なとれさくめ

きえて此の人のむすめとなるとをとかくしく給ひのく宮はくへ

ある人に出し給ひんなとも此清んつひりひかり源の清こそれさとも

中にその清らにもひさはへて給ひんとやおほもとんなるをとの

とのかみとまち給へと 箋 秋好中宮のことくに源乃玉

鬘をとも清うまし給て内さまやさまへんかるなとし内府

うしにはあけつるを源のこし給てめしこと給はき奴へし

あとむりし清心はからひし給てまみつしけるに給まり

まてあさせ給へ　花　源の内侍へ武勢のことをや給詞也　細同
あふさもんやむこれ源とれ人へこそこそすとうしうともかく
も侍らめれ　案　数ならぬ人のうへにこそやうくめとおもうふ
もとるらんぬ物すてはるとの源の詞也
こちのことも又ほのとも清くの人乃事さあるやさ侍んた
きんよのはあちさちなれた　案　内侍と源との清より武勢
あり給あうらんを清くは人のうちぬよりはあちき
あらんとも
あはうにやうくひとめとも　あしきちん人きるかに侍る人
きみや給へも　案　是はい人志て是てるこそ可然物なれと内
侍へ給ふを詞也へ　あしきをとかく人あまたなるへしとなり
たゝ清まてあるにあなんをさうひ侍るへきうまて清給へを
られあうさこれ清よくるこれかくろへ侍けるともさそれのちに

つれなるあるにしとや給ふ　細　内侍の返事　弄　花同
清とるを物あるを清しみをはんは　細　もとの振例なるまる
くらへらるも　案　源より内侍へ清うゆひの打出物也
もくひさしく物ろくちをも更多く是つきて是はあるか
きみを何事とも又らへ人みちくせさをおつう大宮の清るを
せつにちとつを給ひしあらるとおまたきほとくしきほあ
ろひなるとかあり　打出物なくちなと　弄　役人あまた給ひけるよ
典侍や宮今は事つきやう給へきとこの清りともありけれとも
つよしち紫上給へと　案　典侍や三女乃武勢のことをとも世か
あくてものるを給んとともなしとともこもりとも
あくみくせ物とに打りと云て承りの給はうしとものや
給給とも
うちよりり清をりきあつるつるへきんはそうし又まつと物清をこと

りさうひとかんことさ後の事ハとかくも思ひ給ふましくさ
とそ思ひしきさた給ふる　細　内よりも此はしたなきを給ふてとも
弄　はつかうり女三宮を内裏にも御出あれはさやうのこともを
きこしめし驚酔ゆてのよしめてハ無用の宮へとも見かく
もや合給ひんとそや給ふ源の詞也
おもくハ思のうちりしさ後をいうてさやうに又かへん
弄　内府乃女三宮の霊気の秘かのくに見へけるや
又あきうかあるこを見へ給ひてかくまてことくくお
ほさしるとあかくこゝろもとなくこひしうこひ思ひ給
細　源のうく思ふ給ハ女三宮此たうこ可然有子にてこそある
らめと之ゆり給也　弄　女三宮此くこうちるゝ化させるを源り
見えし給ひて花宿にあわらひ給ふとの内府の心也
とそうめ世ゆ事をとも思ひとにおほしあはせける　弄　無其也

又内府夏を見給て柏木をめして何ともいま一きえなり
おん人の詞にみ年ひ清にまきうゝ出給ふ女清子を人の
給よろしくて思召ぬることやと思ひたりされとあり事、
事やおん人のいさをたるハとくあるまと内府乃とまちを
給也　細　無其なり見えたり
女清ハとくもとめを清くさすることのさ後思ひし給ふ事り世の人さ
さにまうしいさみさしみをせちにあ給へとはたるにまの
ハらの人あり思ひと之給ひんりいひましはやうく思ひし出る
を　細　内大臣語給也
このさうれまのく見えてそ女御乃おもまへり　細　をは見也
弄　女三宮乃事を思也
中納言少将にてつひ給ふあひてさそのハはむもとめまうりを給へ
るあり何ふめてさきやりうれる人　中納言か　弄　柏木にお梅の見也

なからにもてなさるらん　細　源と内大臣と也　宗　源と内府
あけくひ給ふとや
さまかへられをおそりえくなきと　宗　別接（ヘツサウ）のことゝ云り
おかなりけるの給ふへく女御さうしいひしもやおほしあやしきもの
給ひ　河　出奥（アフチケ）わくかゝらぬ所也　細同
中将ならかしつる人きゆへにそ思ひ給ふらめいたうもさうらひ
しことをかく　細　物来やうつる人ことはかなうくにまてあさ
なくんとそこにうれり　宗　頭中将あひくにありてこれと
うつさ給ふ人さるの細てそあるらめとや
ゆくまあるくうち出給ふに　宗　さやうなる也と右近のいさゝう
をみ侍りひをもたなくうち出給ふとの頭中将の詞也
物そひさへならぬ女房なともとて見てとらむもとの給へて
宗　見侍りれき女房なとのさくらなるもあるとと右近を中将

のりさぬ給也
あるまかられさても侍りし内侍のうくにあるへうあるて
細　くし右近の詞　宗　と右近の詞やうし女しやさしかの給そむ
女の内侍を奴給なんとのふとそ給ゆる給とや
宮侍へうこもとつりに立侍りしをいさゝかやうのおもやとてそ
あつくれ女をうたちなりにつきまいりぬとまてわりとたち
はりうまゝれ　宗　と右近の詞や我女御へ宮仕るゝは内侍なとに
なし給ことをもやとさやうれ侍そくとのさふあれにとしあへ
ての女房のやあるきさまてと宮仕しに今はむ女の内侍な
奴給りしをはぬへしとにかくに女御のはゝくおりしま
をとく帳の字給也
わまへのはゝをおりつましゐあかりとうゆくきくれを
おまへ　宗　女御なるへし

これ見ゑて　業　光君達の上は君をとゝめひ給也
内侍のかみの事にうしろそのきまんとなるを　細　内侍殊にあ
りたる顔あらそ中将弁しそのかたんや人さにいと納得
してゐるよ　紹　中将の君か心をやおさまると給んや
世　弁おかなるなや
紹さうあるとおほしめしたる事のうちもちてめて
さる御中に人々ぬ人をまうしなまのしくる中将の
君そはしも此はなる　ひとつ　河北道
たのしらにせん給ひくろめあさ帝の給ふせうくれんそ
ゑるそ事のきとのうちくれ　業　紹中将のしこゝそに我
ともゝ人とるとて今ハくろめ何さ帝を給とや
あるひくとさとへはさ給のきさらきてえんとことを給
業　常にあし御衿なやちとく出んかや
みくもこと君け出といひよろくあらまにまつりと出さ給を
たつ　業　上に君の目ろひさ給ふ事の御
中将ハ命くいふまつきてと君にしあやまるとたつることへ
まめやかにく御給　細　上に君の御とし事ゐるハあやまちる
事とや　業　紹中将にえさま給ひて宮人の給さあてくとと
とそ御給へるなや
おかハくろ給ふめてともひきる此宮み御さ今とおもなへにハよ
とおもたちしさ給ふの給ひててそ　平　此詞をおかなと江
君をたるしさめあるや　細　おおかハ猶くしくるくはめて
心ひ給や　紹　人の心むとめると云まめくとや　業　弁おかな
詞やうおひさまへ上に君内侍をさ給そのしをめたく
ひきろ此女衿なれハ内侍もし奴給てもちくあてはちのとある
うめえ打日さしと狂(キャウニン)惕し給詞也

かゝる紀氏か歌にも雪ふりしく行へき道なくしてされはこそいひ
とよう也ひろきひ路とさもはやりなんと思ひしかとも見ひろき路
なり 私 日本紀第一云天照太神踏堅庭而陥股若沫雪以蹴
散云天地乃堅き土をも太神の股まてふみ入て沫雪のことくと
のたまふくちらしせるやいさ沼つる神やと的場なりけるを
つるとてすゑとこそくちらしつるをハ式乗やゝ今集に
こゝ紀氏卯ハ如しき庭とあるへきをすやそうきのをこのみと
乃悪行と天照太神のいつき給へる時ますしおのこ紀
し給ひくはきかひとをるし路ハ河のこすやつ紀庭をも
宮乃ことくちらし給へも天照太神ところきのをされ神
とハ法せうともと又それ一元と弁ね時もおとしひとされハ
それ天のあらたてあるをもとなとへくこゝなる也 細拵すへし
この歌とかくの紀家さる所にしてたち申し給ひ此法也法之

あらめてそ何を雪のことくとのきゆるともあしくあさ也
第日本紀云スさのをの尊とも悪行ともしき給ふは天照太神
服立行てますしおのこさをとせんとてつまるうちを
路しこあかくる紀庭をも淡雪のことくにちらさんとひとあ
つまりくとに雪のことくに天地をもちらし給とかつる日
本紀あさ庭とありとこゝにハかる紀氏卯とあるおかしま
きるすや仮名日と書くへあるを作をもかきたるあさ雨
白立りとかりそさのおの尊とて天照太神ハ法兄中也又
それ元と弁おね息移もそれ元の服立給と天照太神の
いきかひともよく仰されも宮にまとへてとるやとそく立ひ
かあの時ともありちんとハ外服立くいろ給へたおねのる
とむるやうあて何さわりいるも
伊勢ともあされいえと行しきまる給ちんやめ中をくやそたち

ぬれくはろくとるいくこの実たちゝさへされ　花　中将ハ兄也
みな江君ハ妹也古き假名序(カナジョ)注(チウ)に素戔烏尊(スサノヲノミコト)ハ天照大神
の御このかみ也とかくりたるを兄によるへしと江君の
ありさまなとつくしめゆきたるへきともかくて紀君とあとかた
にあかし給ふとおるかより一数ゝ門あるむ類也　弄　かく紀君
ほの細さみまして君とのみとかくれしさまを給りん
よろくへしとや　細　兄君乃ふるに奇特たるさまとありしを也
おおいはちかくさめての給ふと拾ふハさやうに服なとりそひき
ここそのおほんとや　孟　兄の祠神猿乃ことをとらへてそとう
きてせ思ひかくそく江君りさくとゝめてあかりしまき
んてさそめゆるをつるそれとも中将の給也又君乃祠を
みるは江君と君もる中将と中不和なると天照大神
ところさの君乃人ことを兄君のあしさにおもてよく

紛合あるかあれと花の神猿乃祠を見されゝ兄君とかたり
きこえさうし給へり　河　丞人(スケナニ)と
たく御前の御心乃哀ありしまをハ給ひつゝ悔あるきて
細　女御也　孟　女御乃御志(ココロザシ)ゝ令旨ゝ宮に給ひつゝ悔とや
いとかゆくかくそしく下らうかくへるとの給ひきまいり
河　かそうしく中まくゝおるくらゝ　細　かそうしく也　孟　ゝを
くや又心そしく君かゆしきや
きくぬさゝやくとも立ちしてもまくまとひおりきてゝ心
さしとはくしして宮つかへしありきて　孟　くるしひしく紀新(サラ)く
乃役ともし給也
内侍のかみ(よ)との事給中しもし給へとせめ申ゆまは　孟　女御を
せめ給とや
はかましくかくにやくいかゝするなんとおほさに物をいかれ

給へれ 案 女御のこと也
おほとこ乃のことゝもを覚て いと花やかにうちかしこまりてひ給ひく女法
の御まへにまうて給へるついてにまいりて給ふあるゝ乃こゝろにこゝろに
とゝめきえ 案 内府の内侍督也まをと覚給ふと也
ことゝいとあはれやうに覚えて出きたり 弄 ことゝいふへたるこゝろ
なりようつくしき給ふと也 細 ことといふへきる也
いとはるかに給ふをきゝひたすらにきゝ人めて事ありつれにあひなん
内侍乃かみ此事は 案 内府の詞也かくは心えて乃さ後宮仕ありて
御仲合にしんとあさまりての給ふ也
あらうとの御たいとく思ひ給ひ給せさしと 案 内府は何とてや
さぬろと也
いとさいわいやうにの給へていとうれしうもとひく 案 まゐりとかく後
いくの給ふ也

さも給ふにしこゝろえさせてしまひつゝしてくへむとこゝれ女法
とのあそと乃とのつくし後にへ覚ゆしきを給ひてんとくれのと
かくまてちなん法からひつるを 案 かゝ江乃の祠女御のと
のつくし法のあるんと思へかんれさるとそ也
あるへきくるのしまゝやうにさく給へつきえ 案 孟(?)哲覚此
内侍ありと給ひ給ふと覚給ふと也
長女(ナスメ)はあらん人めぬ心ちしてあらん 河 冨(フツキ)なると長文にこゝろ
り覚(サヌ)く後宮ある此中の若菜説あるにこゝろとくへ天耶(ヤ)
郭(ク)乃蔓なるとの様也
むすめゆりしもえとこゝろやうに給ひとや給ふ 河 ちせの心胸中
に心ちしと存くへしと持つくもふしきくさへらまてる様也
やいふ思 細 思とろきくあるもの也 案 かさ此をわし給ふ
あるらひて云へ也

あさくおりてと抱きたるやうなり 栄 舌内（セツナイ）のさりやうちあるとや
をとこ君はひめ君へふかくと読んして 細 内大臣たりしおもへると堪
思ふなるや
いとおかしくおもひけるさ法くをあるりや 細 第五の地也
宮人もちうれ法くせとや 孔 女御の法るまと内侍の給也
皆されるなや 栄 内侍の詞や女法のこゝろよりと給へり
の給ひて手うに出御法ある法くもおや
たとお給ひしの給ハせうん 細 内大臣の詞
まりんのさまにそうして参りし 栄 武蔵とあるとちんすり法也
へそうやん地をとゝや
お陰をおもひくれ法むをめ風んこともくとゝもちんにせちらす
やさんことゝたこゝらめさぬやうあしらはまし 栄 ゆるふ
武蔵の風んことあくとゝも内侍のせちにそうし給ふ

こゝろしめしおもきん物とゝや
いまめでたきやうをとりわくてとて 栄 今日見よ法ん
へ内侍をと云ゆ参し快を法くう給へとや
然しうらさいてされは 弄 秘とや庭ありあると云ん
細 御説秘々や庭ハまると云ふとこゝと案ひしくの心
めて可然也 栄 狭んうるまさ川と出たしくとや
あうするとのんちんへ河らんと 河 長歌の事古今と集にも
長短歌とたゞく事書にも見えされちうるなとはり
一万葉にも見えとも長歌とは一説ニ云 三十一字歌ハ五七五
七と一句とし七々を一句とせると仍ちるさ歌也短歌ハ五
七と一句とし別にうるさ歌やとこゝと長歌短歌これを歌
の口伝にも法もりくにたるもあると見後以下古来風躰抄
短歌ニ云説枝ん雅引長歌を後判ニ云長歌短歌なま

あまり歌の名也たゞをりく歌とも同じものといひあやまれる
を称歌の一体とによめるをば旋頭歌といふ是も疑一決
なし又家隆院久安六百首にも短歌と出されたれど人
皆長歌を称之清輔朝臣は三十一字歌を長歌と
いふ或説長歌とは今のはいかいをあつめたる歌也短歌
とは長歌の奥に必反歌あるをいふ也仍長歌をも
短歌ともいふ也
清輔ハせんみちをてらもちうへし　案　天子の長歌御
頌しては之合様也
うたハそのうちにかなをもそてまそわかしまきはなるといふと
ようきらし給　弁兄人ともの清事也　案　中比とも歌の應にた
世し給人ハ面白歌をあつめしをこともひんしるとく
内裏乃とうし給也

人の折やをみるかたこそありや　細　若菜の地也
やまと歌ハおしくとも清をも侍らん　細　紀の貫之の詞
案　ひろくとも清きもんこのをは紀貫之乃詞也
むかしさかしさの二人ところなりやよしを給へく
案　貫之しらぬハ内外の事も心をくし給へとも也
清きことの心乃やまとうたも　花をたゞ人にわかつのひたよりすると人
を御ひらく心をそてはしそのそれしと云ると清きこと
云と云也　細　かくの中諸のにこそとそていりんとも
清くをもうちつゞ侍らんとて　案　さやうにおしくも
此をことくきんとも
よくしまうて申しありり　案　心上此紀氏貫之朝臣也
清九性のしろしるとあてく女房古め人くお清也
案　古めるみとにおりしきとも

よのつねひとりぬるをもくるしくおほえてなんなくさめける
宗 そこ人にて実雄へし
女御も法わすれてあるまてとをかく見ゆるにやおかし
たゝこの色も物思ふしきわたをあそふ乃もうち見えたるに
そのよ給はりまさるれとてこそしはしうち物はしめ給へ
と世人をこそちからおもしろきめるとさ給くたひきを
見し 尚侍乃かほの色つらしぬなちをとりまさりて
さしてかくありかひ給と世人はさりくいふとや
細 あかのちるへもしつへ給さくかくをしほまくるすと
ありうさし此人のころしくぬなちをとまるうつり
あかくほうひ給とよの人乃さ給くいふとや
宗 さもとせん内侍乃ちのこちひとちかひ給ゝとなれ
こなまものしなまへぬりとめ也かすかうち思めし給

どまこのへちかくこにや極りけるしきとなめ給と
ありけんかりうるくさし人とひ給かくやうになし
しを内侍のちかつくしきにめ也とや